

318
259



始



313
259

軍事雜誌社編輯局編纂

軍人所感文集

全

東京 須田書店發行

軍事雜誌社編輯局編纂

軍人所感文集



東京須田書店

全

大正

2. 7. 22

内交

序

掲集
一 げ め 本
兵 卒 諸 兄 の 文 章 を 請
を 集 め て 在 營 中 の 心 持 を 示 し 兵 卒 諸 兄 の
一 兵 卒 諸 兄 が 偽 ら ず 飾 る 所 な き 苦 樂 の 所 感

二 社 會 一 般 の 人 士 殊 に 兵 卒 諸 君 の 父 兄 達 に
念 郷 娛 を 兵 卒 諸 兄 が 偽 ら ず 飾 る 所 な き 苦 樂 の 所 感
た ら し め た い こ じ
郷 間 に 於 て も 本 書 を 繕 い て 服 役 時 代 の 紀
念 郷 間 に 於 て も 本 書 を 繕 い て 服 役 時 代 の 紀

序

軍隊内の眞状を此の兵卒諸兄の實感によつて知つて頂きたいこと。

三 軍隊教育の任に當られつゝある諸賢の御参考に供したいこと。

四 兵卒諸兄の多く誤り易い文字文章を修正して作文上の参考としたいこと。

此の四つの目的が少しでも達せられんことを望みつゝ。

大正二年三月

編者識

軍人所感文集

目次

入營後の所感	一
第一期間の回想	三四
炊事當番の所感	八七
第三期の所感	九〇
行軍後の所感	九三
前哨勤務の所感	九九
夜襲後の所感	一〇一
廠舎生活の所感	一〇五

炎熱行軍……………一〇七

水に就ての所感……………一二四

新兵掛豫習の所感……………一二五

戦鬪射撃……………一二六

第三期中の所感……………一二八

二年間の回想……………一二二

日記の一節……………一二八

古兵の心得……………一二九

下士候補者たりし所感……………一三六

一昔以前の軍隊……………一三七

夜間演習の所感……………一四一

在營二年の夢……………一四五

噫その夜……………一六二

ふかし芋……………一八一

軍人所感文集目次終

軍人所感文集

入營後の所感

(正)

誤)

退きて

計る。物ノ数ヲカ
ゾフルコト

謀る。思慮スル
コト
重きを

古人曰へり光陰矢の如しと誠に然り。願れば舊臘初日草木枯凋滿目蕭條たるの時親戚知人に送られて故國の山河を辭せしの夢未覺めざるに早や六旬の過去とはなりぬ。教官上級者の熱誠なる指導教練を受くる既に日淺からざるなり。退て入隊に當り在郷軍人等の言と現に起居の有様とを對照すれば、實に雲泥の差のみならざるなり。先輩の言によれば練兵に内務に毆打鞭撃を受くるは勿論總ての點に於て少からざる艱苦を嘗めざるべからざるものと思ひ居りしに、豈料らんや班内和氣霽々親睦なる一家庭の如く積日團欒の樂に溢れつゝあらんとは。且隊内の庶務は悉く古參者の掌執に係り、只管我等學術の熟達に重

入營後の所感

非ざるなり。

得しは。

入營後の所感

を置かるゝに至ては、實に無限の感に堪へざる所なり。時に或は練兵の上に於て苦勞を感ずることあるも皆是身心鍊磨の基礎たり、寧ろ愉快といふべきのみ、宜く誠意職責を勉勵して武を練り文を勵み軍人の本分を全ふせんと務むるは吾人の責務にして又古參者の厚恩に答ふる所以なり。然るに余や資性頑冥にして技能の熟達意の如くならず、決して茫然日を送るべきの時に非るなり。第一期四ヶ月間の中既に半餘を空費しぬ。去れ前半期。來れ、後半期。滿腔の誠心を以て一意五ヶ條の勅諭を奉戴し、奮勵以て事に當らんとす。今は新進を期するのみ。

ありし時とは萬事變りし事を感じました。彼の殿下の前日寒風はだいを通すのもいとはず御熱心に練兵を遊ばさるゝに付ては、吾々は増々軍務に勉勵して國家の爲めに身を捧げて一層勉勵しなければなりません地方にあつては、軍隊は非常に壓制的の者に思へ居りしが、入營し始めて軍隊の様子と云者がわかりました。又故兵が新兵に對し温和を以て兄弟姉妹の如くに教へらるゝに就ては其の厚恩を報ゆるには尙増々軍務に勉勵して善く上官の命令を遵奉する外はありません。此の軍隊に於けるが如く地方に在りても少尉殿より吳々も申されし如く協同一致と云ふことを頭に納め軍隊に於けるが如く行つていつたならば終には立派なる日本國民と成らん者と感じました。

膚、益、増、思ひ居り、報う。

自分は入營前は定まりたる生活をしなくして、十二月一日に入營致してより、軍律厳しき軍隊生活の一人となり最も感じたのは時間と著裝

入營後の所感

(正) 誤) 續く。

予、暖き候。

有りし。

入營後の所感

と動作である。自分はよき教官の命令を受けて毎日練兵や學術を習ひ又諸勤務等は身體のつづくだけは勉める心なり。

指折り數れば新兵時代の二星霜天清く春長閑に鳥は四方に囀り春は浩然の氣を養ふ、寒梅正に綻び花笑ひ暖候、諺に云ふ光陰矢の如しと。宜なる哉余徴兵に徴されて慈愛深き父母愛らしき弟子親しき友皆振り捨て、汽笛一聲と共に懐かしき故郷を去りしは忘れもやらず明治四拾年十二月の事今は愉快なる軍隊生活に日送り、郷里に有し頃は鶏の啼く以て起床顔を洗ひ今は喇叭に夢を破られて床を離れ食事終りて武器被服の手入午前の學科忽に新兵整列の聲營庭に於て各個教練火曜金曜の二日は野外夜間の演習、代々木に於ける美感は太陽の半ば地平に線に没し太紅の餘光を漂はし彼方の森を縫ふが如き遠き眺望、是れ日本第一富士の夕陰日、實に言語に盡しかたし。復何に聞く入相の

予等中隊。

を。

鐘、時に急ぐ鳥、馬に鞭ちて忙しき歸家の將校、余中隊揃て歸營折しも雲間を潜りて覗く月光寒々として下界を輝かし、風は梢を流れ、あたりは寂寞、時有し夜間の演習一面銀世界代々木執行歩哨動作却説も嚴肅なる軍規の下に樂々として武を練り膽を養ひ寒氣凜然肌に徹する極寒も身骨を溶かさんとする三伏の候も意も介せず任務に鞅掌し居た。又時々不時呼集に種々武装もあな面白き。予も其一人なり以て予等が上官より受た深厚なる大恩の萬分の一に報せんとす。右入營來の所感とす。

私共入營してより最早夢の間に二ヶ月も打過してしまつたが、顧考すれば此間には入營前見聞した處と種々其感に異にして居る事々覺へました。第一に新兵に對する取扱に就て入營前は少しの間違にて手落或は勤務及規則等を怠りし時は手荒き扱わさるゝと聞きしに今は

入營後の所感

(正 誤)

精神 ココロ

誠心 マココロ

駈歩

自分

入營後の所感

其反對に如斯場合は手荒き所置に取らずして其者の誠心な苦めて改心せず居られざる方法にて扱居らるゝなり。勤務中手落の爲め上官に皆の前で其不心得を責めらるゝ時は最もつらく感じ、又かけ足等永く續けた時は倒るゝ程の苦を覺へ又善行の爲め上官に賞められし時は無上の嬉しさ。併身分の未熟より力の及ばざる時は實に悲しく感じました。乍作幸にして名譽有る近衛歩兵聯隊に入營する事を得て如斯に扱われ受け、困苦に堪へ身體を健康にし誠心な修養して、事有る時は未熟ながら國家に一身を捧げて軍人の本分を盡し君の御恩の幾分を盡す事が出来るかと思へば困苦も何も皆樂の感に移り此後益々軍務に奮勵せねばならぬ感が、思へば思ふ程深くなつて來ました。

有つたれど。

入營せし時は高壯なる家居に入り、又多分の兄弟を得し如き感となり、入營當時は萬事不慣にて困りし事も多く有たれども、懇篤なる班長殿

恩 思

不馴

又古兵さんの指導により、漸く軍隊生活に慣れて愉快になる軍隊生活、見る物聞く物珍らしく、又日曜日には引卒外出にて予は再び小學生徒に返り運動會に加うる恩あり。眞の軍帽眞の軍服眞の劍を佩び舉手の禮を施すさへ昔夢を新にするの感あり。新兵の一行數十名なり。此日晴天陽光輝き予等新兵を憫みて望むるに似たり。道行人々眼光予等を射るは抑も新兵を嘲てか、抑も新兵を恤みてか。一行は二重橋に至り班長殿の指導の下に最敬禮を施しぬ予忠良なる軍人となる。否忠良たる軍人たらずんばあるべからず。否忠良なる軍人に養成せられつゝ有るの感を高めたり。やがて市内を見物せしがわれらの姿がガラスにうつるを見て餘り舉動の不なれを恥ぢて感じたり。班長殿の命を下され歸れば午後三時我が新しき家に歸れるなり。嗚呼愉快なる軍隊生活の日記を昨りぬ

入營後の所感



(正) 恙なく。

(誤)

馴れ。

觀念。

精神。

悪しき。

入營後の所感

私は昨年徴兵検査に合格し去る十二月一日無恙く名譽ある當聯隊に入隊せり。入營後最早二ヶ月有餘を経過したり。入營當初は一週間の晝夜を一ヶ月乃至二ヶ月を経つが如き心地せしが、今日は一週間は一週間の如く何事も面白く食事身體共に訓れ、特に此頃は營内野外に於ける學術科朝夕に進歩しつゝある時なれば我等新兵は一刻も油斷すべき時にあらずと感念し、何事も勅諭讀法に従ひて未來は立派なる軍人とならん事を祈り居れり。扱て私は入營後今日迄で第一に感じたるは術科上より己が精心上にあり。入營前には親に不孝し又すべらしたるも別に心に懸けざりしが僅か二ヶ月餘りの軍隊生活と教育を受けたる今日は親に不孝したる事もすべらしたる事を明かに分れり。然らば今よりは一切悪き心は捨て除隊迄には生れ化りたる如く精心を磨き上げ郷里の人を驚かすのみならず、村内青年の模範となりて教官殿及び上官殿戰友等の御厚思の萬分の一を報ひんと思ふのみ。

願るに。未熟。

教へて。

先ず私里に居りて人より軍隊の話を聞くに軍隊と云ふ處は新兵一ケ年は古兵上等兵の洗濯又靴の手入りをしたり朝早く起きて水使用ひすると云ふ様な話を聞きましたから自分も其の覺悟で入營してききました。が其様な事は少しも無く水使用ひは一切させず。古兵様がして下された々の事を懇に教ひて眞の弟の如く思ひ下され、又班長殿は我が子の如く思ひて下され誠に親切に教られる。私は身體を大切に君に忠義を盡さねばならぬと思つて日々を面白く暮して居り又日曜を樂むで居ます。

昨年十二月一日を以て入營すると間もなく新年を迎へ今早月打ちすぎで二月となり一期の検閲も近々となり歸見るに家にある時は唯茫然たる身熟の身や月日をへると共に此規律正しき軍隊の用子深く心中に

入營後の所感

身軀からだ

入營後の所感

しみ渡り世の節にかわい子には旅をさせよと云ふ事あり。さて吾々わごこまでも身の有る限り軍務に勉勵し國家の爲に義務を盡さなくては成らない此からだ以て軍人たる義務を盡さんが覺悟なり。

○

今や到る處軍人團ありて在郷軍人を以て組織し或地方にては練兵等の豫習を行ひて入營者の心得に便にす。先年徴兵せられしも軍隊内部の動作其他の勤務等には門外漢たる予は更らに分からず。爲に磁石の方針は立たず幸ひ軍人團員の開會せし豫習會を見又は先輩諸兄に聞もし尋ねもして軍隊生活の一般を知れり余は軍人團の組織に依りて軍隊と地方との聯絡をたもちて軍隊内部の模様を地方人に知悉せしむる効果の大なるものなるを知れり。
十二月一日入營して今日に至る迄早や二ヶ月餘を経過しぬ。新兵としての期間も残り僅かとなりぬ此間に所感の節々左に大略述べんか。

嬉しく。

先づ新兵全部はその職業も千差萬別にして従て一般不規律なる放縱生活をなしつゝありし也予も亦その一人也然るに身一度軍隊生活に入るや總て規律ある著装、言語、動作を上官の指導の下に習ひて好軍人と爲るなり。此れ第一に予が規律生活を感じたり其後數日にして

「銃及び劍の番號を忘るな汝等の魂なるぞ」と

上官より訓示されて初めて軍人精神を知る。

班内總ての事は一際分らず古兵に尋ねれば

汝等は勉強せよ、眞面目にやれと

このみにて要領を得ず。二日を過ぎ三日を経て漸やく班内諸動作の要を知りて、地方にて豫想せし事や見聞せし事とは格段の相違にて、第一古兵の新兵に對する頗る温情を以て迎へ、信を以て吾々を導くもうれしく感じぬ。予や他日在郷の折には必らず地方人の誤解の夢を破りて一村一郷のものをして眞想を述べん考へ也。少尉殿より宮殿下が寒

入營後の所感

(正) 御嫌ひ。是れ。

(誤)

入營後の所感

風凜冽たる日にも御いごひなく兵卒の教練に御熱心なるのは只感涙の外ならず。吾々兵士たるもの粉骨碎身して軍務に勉勵すべき也。此れ予が深く感じたる所也。其外長距離の力進を試みて歸途青山原頭に到りて、銃劔術を行ないて尙は餘力あるは國家に盡す誠心の塊にして、勵精刻苦屈せず撓まざる忍耐の賜也と感せり。他日吾々の生活上に於て總ての苦闘をなし破りて勝を制するは此れ余が軍隊生活の賜なるを謝さざる可からず。

入營後感する所は新兵の待遇の丁寧なる事教官殿伍長殿上等殿の教育に熱心に親切なること等なり又自分は郷里にありし時父の言により他人にすかさね賢者と思ひしに入營後何事も人並に出來得ず演習も内務の動作等は如何に熱心にやりしとて人に後るゝ爲、萬一昇進なき時

如何にして。

は如何にして郷里の友に對顔せんや。しかし此の入營中の修業は一生の修業なれば定めし一生には大なる利益は限り無らん。

古人の言に光陰は流水の如しとか予が聯隊の門を通じてより既に一年の六分一は夢の様は過去つて嗚呼寒くなる寒くなると思つて居る中に何時しか上野の山の西郷の後あたり、櫻の枝が淡赤く遠望すれば紅雲の棚引が如しとでも思ふ中に水邊の柳は綠色を呈し、一重の肌に暑さを凌ぐ中に木の葉が散れる又雪が降ると斯ふ云ふ風で光陰程遠きが如く短きは無かるべし。余が新兵の一期月も此速かなる光陰の中に其半を越してしまつたが故郷に在つて世人の噂に軍隊の生活の諸事萬端嚴格なる事は略ぼ聞知らざるにあらざれども實際入營して今日に至りて見れば故郷の談しとは又一段異なる所あり。従つて其殊更に感じたる事も少なからず。いでや左に予の感じたる事を一二を記さんに山

入營後の所感

旅 族

殿下でさへ。

扱てをき。

入營後の所感

深き故郷の空に兩親に愛育せられ氣儘に成長し來り今や軍籍に身を投じ軍規風規も知らざれば身体の究屈なるは我れ人同じかるべし又禮儀作方も意の如くならず練兵場に於ても多少困難なるを感ずる事も數々なればあゝ軍隊程究屈な所が有る物かと一時極短に思ふべけれど、決して然る者に有らずして斯く思ふは誠に不甲斐なき空想にして予等の例にも言とする所に有らず見よ畏くも 陛下の御血旅なる所の殿下に有りながら寒暑も厭はず軍務に勉勵し去りぬる日は此寒氣嚴しき中も厭はれず夏襦袢一枚にて予等兵卒同様に銃劍術に餘念も無く御教育遊されし處を拜せし時予は思はず嗚呼畏くも 陛下の御血旅なる殿下でさいも我々如き賤しき兵卒と共にあれ程迄熱心に軍務に従事遊ばすかと思ひ、予等は困難は去てをき一命を捧げても尙ほ之に報ずる事難かるべしと只感ずるの外なかつた。

又過日學科の時に殿下の幼年學校時代の話を聞くにつれ何如に御困難

考へ。 駈歩。

入營後の所感

遊されしかを考へ益々其有難きに感じ此位の馳足は何んでも無いと熟々暗涙に咽ぶのであつた。又之のみならず我々は畏くも 皇室を直接守衛する近衛兵の一人となり凡人拜し難き御居間近く之を拜し又之を守衛する任務を負ひ陛下の股肱と迄成り國家の爲皇室の爲一命を捧げるのであるから斯んな喜ばしきは無く 皇恩の萬分の一に報ゆるを得るかと思ひば之又實に難有く感ずる次第なり。又之に従ふ我軍隊の如何に軍務に勉勵なるかは一見して只々感ずるの外なく、能其輸を守り上官の命を承る事實は直ちに朕が命を承る義なりと心掛け、其命令を遵奉するの嚴格なるは海外に誇る所なり。予は幸に此名譽ある近衛隊に編入され 陛下の手足と成り國家の爲 皇室の爲重大なる責任を帯ぶるなれば予等は益々此御勅諭の御旨主を守り一意専心軍務に勵め益々國家の光榮を發揚すると共に海外に例なき 皇統を維持せざるべからずと深く感激に耐へざるべからず。未だ書き残したる

入營後の所感

所感もあるべけれど限り有る紙上故予は又後日に記さん無學無才なる私故愚筆斗りに走る。

觀念

報いんか。

吾等入營してより茲に兩月を出する事數日に及び又而して見聞實行せる所少なからず然れども吾等は未だ軍人の如何に規則的なるか又耐力の豊富なるものかは完全に了解する事能はず。従て其の所感多しとせず、故に吾れ入營後今日に至る迄の大略を述べんとす。吾れ前題新兵の覺悟中記せる所は今尙腦裡に憶して去らず恭なくも 天皇陛下の吾等軍人に對し如何に御心注がせ給ふかは勅諭讀法等に於て拜讀する所吾等之れを固守して以て御恩の萬分の一をも報へんか。然り吾等は其の自分を盡して以て報ゆるの外なし。茲に於てか自分を盡すと盡さいることより吾等一身の善惡如何は定りなん。従て軍人の任重し然れども茲に國家として最も惡むべきは社界に於ける軍隊の感念即ち國民

規則 遭遇

軍紀

入營後の所感

の軍人となるべきを如何に感ずるか。之れを嬉とするもの多しとせず従て軍隊に對する感情冷淡なる事明なり。然るに吾等入營するや其の懇篤なる事到底社界一般人の知る所に非ず。之れ然るべき事なり一度軍籍に身を措きたるもの、又之れを知らざるもの甚しと云ふべし然れども吾等未だ日淺しと云へども其の狀吾胸底に徹し之の社界惡感を破棄すべきは吾等の本分たる事言を待たず。吾れ進て之の任に當らんとす。かへりみれば軍隊は國民學校とも稱せられ、精神修養上最も良しきを得るものなりとも稱せらるゝに至りたるは、之れ吾等として實に喜ばしき次第なりと云ふべし。凡そ軍隊は何事と雖も軍規を以てし一居一動皆規則的なり。従て其の爲す所も又良しきを得るなるべし斯の如きは生を我國に稟けたる者の須からく之れに慣らしめ國民の規則的にして耐忍の性を得せしめば其の爲す所一つとして能はざるなく逢還する所又窮する事なきに至るべし。吾れ世人をして之の規之の

入營後の所感

性に慣らしめん事を欲して止まず

抑も昨年拾貳月一日を以て身を當中隊に養ふや最早貳ヶ月餘を経過した。此の間耳目に感ずる所は數多ありて列擧するに遑なき程なれど其の一部を此處に記せん。扱入營當時は我が全身を戰友に任じ尙班長殿や班の上等兵殿に世話を受くる事父母に受くるよりも尙勝さつたのである。此の有難き厚情を受け居たのは久しき間であつた。追々日の經るに隨ひて漸く軍隊内務にも解し得る様になつた。余は入營前に斯くも面白き愉快なる學校とは一寸も思ひ依らなかつたが、然し入營後の十日間程は實に淋しき苦しみ處と思ひたは其れ徒手體操である。四五日を経た二三日は階段に上り兼ねる程の披勞を來したが、追々に之れに慣れるに隨ひて漸次披勞を消すると共に宮城拜觀の如き有難き得てより面白き感を得た。其後度々野外演習夜間演習行軍出づるに隨ひ

後

疲勞

突撃

傷腸

無かる

尙一層の趣味を増した。之謂ゆる世に云ふ苦あれば樂あると云ふ一言に基くや然り。最も面白き仕業であると感じた。此の一期を首尾克く卒業して兄様等と同一に練兵に加わられたき事を朝夕に祈つて居る。

○

ラツバに起きラツバに寝ぬ軍隊生活も早や貳ヶ月を経一期間の半を終りぬ。此間聊か所感無る可んや。地方に在る日我も思ひ人も云へらく軍隊と云へば直に一種の恐怖の感を抱き必ずや冷酷せらるゝがの如く思はれたり。噫々此感に誤るを見ずや。兄たる古兵諸氏が我等に對らるゝを同胞の弟を慈むが如く知らざるを教へ過を悟さる。又は教官少尉殿我手の凍腸にかゝれるを見られ或は野外手袋を許され或は藥に或は何にと爲に直に全快するを得たり。如是く慈母が我子を慈むが如し此情ある教官に引率せられ天麗なる日代々木の原に白雪頂く富士を仰ぎ散兵突撃以て敵陣を占め演習終て食事を取るの愉快は他人の入營後の所感

(正) 術科 誤

作法 規律

入營後の所感

知るを得ざる樂とす。さあれ残念なるは朝に示さる實科夕に教る學科の一步を人に遅れを豈に憤勵一番以を一期を終ざる可んや

軍隊内は日常官職の階級明にして禮義作方嚴格なり。且つ紀律の嚴正なる事恐らく他に非類なく能く軍紀風紀を保ち協同一致の最も堅固にして恰も一人の成す如くなり。此の睦しき軍人家庭の間に不知々々軍人精神即ち大和魂は養成され是れにて平時は國力を増し戦時にありては一命を捨て國敵を防ぎ國光を海外に輝し日本軍人の責任を全し國に報ゆるの意を得るなり。嗚呼吾が入營後の所感之に過ぎず。

余は明治四十年の初冬を以て名譽ある軍籍に身を奉じたのである光陰は流水の如く我等入營してから早や二月を暮た願るに入營當時十日二十日間の永き事實に一日は一月にも似てあつた。誰の顔を見ても皆

酒 寄る。

途方 懐し。

色青ざめて何思ふらん唯だぼんやりとして舍内の角にたゞづむのみである酒保に行て見れば二三人打奇ては嗚呼情ない名譽の監獄とはよく言つたものだ此先二年間何ふして暮しやら思はれない實に二年の無駄奉公だなごささやくものもある。余は斯如き憫むべき感想を抱て居るもの我帝國に有るのを痛く悲しむ様ふに成つたのも今始めてある。成程皮相の凡眼を以て見れば二年の間挺身自家の生業を抛擲して軍隊に奉仕し何一物も齎らす事なきを以て嗚呼二年の無駄奉公なりとの言を發するに至る。之畢竟目前小康を希ふの愚夫の言たるを免れないのである。其始め僕も俄に先輩の友を戀しくなり尋ねて行けば唯だ勉強し給へ確り奮發してやり給へ眞面目にやり給への外は何も……話してくれない。十方に暮れて居る中に十日二十日と過ぎ立つた。古兵さんは兄よりも親切である。班長殿は母よりもなづかしい。親より勝る懇篤なる教官より毎日術科や學科を教られる其内勅諭讀法など難有き御

入營後の所感

入營後の所感

論しも習つた。最も感じたのは誠心と云ふ事である。誠心程重んずべきものは有まいと思つた。即ち其發する所君に對しては忠となり親に對しては孝となり上官に對しては敬となり同輩に對しては信となる昔より今日に至る迄で天下に其名を上げしもの皆悉く至誠よりなるのである。

見よや我國民として一度手に唾して立てば尨大なる清國を軍門に屈せしめ近くは強大なる露國を撃破し遂ひに一大強國となり、全世界より敬せらるゝに至つたのである。其原因多々あるとは雖も其重なるものは皆至誠より胚胎したるものである。嗚呼重んずべきは至誠心、貴むべきは誠心である。今に學科も術科をももしろく、整列の聲も初音をもらし驚の聲と聞きまごう様になつた。今や我等新兵は現在遭遇する其困其苦皆困苦缺乏に耐へ、自己の精神修養であると元氣一番せねばならぬ時である。

先ず入營前郷里に在りし時軍隊の生活も略ぼ知得せりと自信し、其の如何んは總て軍籍に身を置きし在郷軍人より聞き得し事にして第一軍隊なるものは階級に依りて成立ち、新兵の苦勞は亦格別なりと。其覺悟を以て入營し茲に日を重ねる六十有餘日然るに自分が想像せしとは異なる事大にして、新兵に對し如何に醒ならんと思ひし二年兵は至て我等に親切にして、然も眞の兄の如く入浴も早くせよ夜も寝ても風邪に冒さるな、扱ては起居食事に到る迄で赤子の如き我々を能く導きては寸時も速く軍隊の事情に通せしめ、萬事に馴れる様を手を取る如くせられて其都度毎に生は郷里にて聞き及びしと相異し軍隊は禮式は勿論情誼も其れに供ふて深きものなるを知れり。亦殊に感せしは、時間の利用法の如何に其當を得たるものなるかに驚けり。次に欲望の變化なり。唯欲するは睡眠と食欲あるのみにして他なきは境愚の變化に依

入營後の所感

入營後の所感

るものなるかと、今更ながら斯くも正しき生活を嬉ぶ。

○
 軍籍に在りて兵營生活を爲せし諸先輩より軍隊の模様を聞き常に酷烈なる想像を書き居りしと、同時に自己の經歷が赤貧、痛苦、悲觀、惡闘、勞働、強迫等の連鎖なりしを以て入營後の所感も餘りに其薄きを如何せん。唯次に二三を述べんとす。群衆心理、團體心理と云ふことを聞きしが余等が寒風に洒され或は長距離を馳せて尙仆れず體力の將る絶えんとして尙銃劍を振ふの餘力あるは國君に其身を捧げし眞男兒の勇氣溢るゝ所なりと雖も、亦一に協同の勢なるべし昔日の智將は或は此勢を利用したるならんか。

軍隊とは全然階級制度に依りて協同するのみにして和氣霽々たる交際を見ること能はじと思ひしに、入營以來戰友諸氏が余等新兵に對して兄弟も唯ならざる待遇互に用ふる言語は粗野なりと雖も眞實を含める

曝す。

中々に。

暖かさ思も寄らぬこと多かりき。

日々の練兵内務上の事共仲々に繁多なる爲め安んじて筆執る折もなしとは時々耳にせる所にして時間經濟の巧みなる入營以來特に感及せり社界の事業も此妙法を應用したらんには成らざることなかるべし。體力を用ふること大なるを以て腦中には何等世俗の念を書き後圖を考量する等の餘裕なく、従つて本能性に近付き食欲睡眠の度益々増大し後

○
 れながらも筋肉の發達を見たり。
 自己の弟の弟の如き戰友と常時相語り而かも話頭に上るものは無邪氣なること多く昔に歸へる心地するもをかし。

○
 私が入營して後二ヶ月もたち感じたことは澤山あります軍隊は居内の規則が嚴格であることが感じました其ほかの聯兵はすべてはげみ自分にて愉快で有ります。

入營後の所感

練兵、勵む。

(正 誤)

終り歸りは、
歌ふ、腹が。

樂

出來ず。

辛い。

朋友、
夜間。

入營後の所感

其の内でも最も愉快なるは野外演習又は夜間の演習が何よりで有りま
す演習をばりかへりは軍歌をうたう何より愉快で有ますそれより内務
班にかへりはらがへり食物のないのが第一感時です。

扱て軍隊は家を出る時の割合之無く身には力、らくにて水仕事なさ
ずして聯兵を致居ながら少々もできずこまります尙困難のは學力に
てのみこめなるのでこまりますでつらむと思なり扱て軍人は種々の兵
がある内歩兵は夜を朋友と思ゐて夜會演習をのぞみ出行致すなりと
かんじました。

嗚呼予は新兵として入營以來最早二ヶ月も経過した。過去を思へば恰
も夢の様である。此の間爲す所果して幾何なるか。只一片國に報ゆる
所なくして我自ら顧みて辱ちる所である。次に入營當日の有様には

班、
班。

目撃。

爽快。

入營後の所感

實に感じた。余は當聯隊第〇中隊へ編入せられて同隊から出張の下
士官に引率にて兵舎に入れば、各班とも清潔にて一點の塵なく武器は
正しく列し又被服其の他の整頓し、有様は帝國陸軍の規律厳正なる様
實に目撃した。程なく古參兵來り小生等新兵の身に集りて私服を脱し
て軍服にかへらるゝ扱ひ等は最切にして、兄が弟を世話する如く又靴
は不具合なりなど、奔走盡力して私服は木札を附し郷里に送るべき手
續など等の取り扱ひ方の懇切なるに感じた。又入營前は軍隊生活は如
何にも窮屈にて又辛苦の様に思ひたれど入營し日を経に從ひ愉快を感
ずるよーになつた。是れ師父の如き上官あり慈母の如き下士官あり
又兄弟の如き戰友あり殊に階級明らかなるが故に恰も一家團欒するの
思ひして未だ一度も争鬭の如き事を見ざるは實に驚いた。又予二ヶ月
間に體量の増したのには驚くは。入營して一貫目も増した。是れ起臥
飲食運動の適當なる爲め身體は肥滿して壯健なる精神は爽快にして活

教へられ

氣を著けて

入營後の所感

潑とならんと自ら喜び感じた。

吾等はこゝに入營して後早や二ヶ月以上にもなり、私は皆と一同に同じ御飯を食し、學科術科も同じに教いられ、其の内に私は皆より後るゝかと思ひ日々其の事に心配し居ます。詔諭にも軍人は忠節を盡しを本分とすべしと給る如く此の忠節の心を以て日々軍務に従事して一日も此の忠節と禮儀等を忘れぬ用にと思ひ居ります。室内又は術科學科に於ても怠る事なく上官の命に従ひて一寸の暇にも其の事を忘れぬ様にと心掛けて居りますが、時間落ちて上官に立腹致させる事も度々あります。又術科學科も人よりも出来ず歳は早や二十二歳にも成り其の上の人より心の廻りは少くして何如にも自分にて心は馬鹿に思ひて居ます。其の後は一層心を改めて氣を付けて軍務に従事致す積りであります。

濟ます

入營後の所感

我等入營せしは今を去る二ヶ月前なり頃は十二月一日でありました。當時は各別堪へ難き程の寒にてもあらざりしが此日は少々の降雨なりされば雨具も持參せざれば心に心配して居りました。しかし朝早く起き朝食を齊まし入營時刻を待ち居りしが、やがて午前八時となりしかば當聯隊より引卒官出張せられ是れに引卒されて我聯隊に到着致しました。見れば我が同胞の壯丁は見事に整列して居りました。所で我も福島聯隊區と立て記されし處に整列して待ち居りますと一々姓名を呼び始められしが間もなく我も呼ばれたれば勇んで出て見れば今考へ見れば第六中隊前でありました。此處で大略の身體検査を執行され幸に滞りなく相齊み眞に第○中隊第三内務班と定められました。すると上等兵殿に伴はれて此處に入營したのでした。入りて見れば上等兵殿や班の古兵さん等に色々の軍事上の話を聞かせられなんとなく變な心に思ひ居りました其夜に至れば

一種

悠やか

入營後の所感

喇叭は鳴りました其喇叭は何やら少しも知れず古兵さんに教へられ寢臺の上に一泊した時は實に心地眠りました。

其翌日至れば又も喇叭により食事をなし或は寢起きをなす等誠に一言異様な心に感じました。かく日を送り居るうち三日たち四日五日六日七日と経過する間に早や十二月十日となりました。此日には畏くも宮城を拜觀致し並に 兩陛下の皇旗迄で拜觀致し此時には實に軍人は有難き事を感じました。同日同所に於て中隊長殿より近衛の名譽ある點を悟され又軍人の本分等迄で説明せられた時には深く心に感じたり。

又少尉殿よりは學課の折りに軍事上の話を至され勅諭の五ヶ條及び讀法の七ヶ條など讀み聞かせられ又は少尉殿學校次第の宮様の御話なども聞へても我等軍人は一日も心ゆるやかに思ふ事は間違てもあるべからざる事を考へたり又我等入營せしより今日に至る迄で二ヶ月以上も日を送り此間には種々動作を教へられ内にも心に止まりしは銃劍術な

折々 練兵

り是れは敵と近きて行ふものなれば目前に於て勝負を決する事なれば充分に心をねり熱達せざるべからざる事を知たり先歩兵は小銃により敵に向ふの職なれば是れを上達せざるべからずと感じたり。次に我等は早く技藝に熱達し一期の檢閲を終へ古兵と同じく練兵致し度きと思ひます。實際軍と地方の事とを比較すれば天と地の區別ある如く感じたり。何分第一毎時喇叭の號音に依り起居致し居る事一言異様に思はれます。我れの思ふやう軍隊は嚴格なる事嚴格なれど又愉快の時は誠に樂みのある所と感じました。

入營後の所感といへば甚だ多かれども重なる事は右に示したる事のみであります。

○

入營後は水のながれるかよに月日もたちすぎし尾々心もてことに軍隊というは内でもうよでなく軍隊はよいところである。まい日聯んべ

入營後の所感

(正) 誤

鍛ふる。勅諭。要領。

暮せしが。

藩屏。

震撼。軍紀。起囚。奉戴。

嫌ひ。

慈。検す。

入營後の所感

をならい學力もならいて心のきてするところである。我れをもにかんじたのはちよよくよでありすよたはやかんいん習はことにのぞんていませがよをりをがしらないのでこまりす

我等は入營して後早や二ヶ月以上も暮せしが今だ水仕事も致さず何事も古兵様に御たのみ實に有難き事と思居ります我等新兵されば我等新兵は日々教はる處の練兵を熱心に致さねばなりません。

明治四十年十二月十五日名譽ある聯隊へ入營するを得たるは予の光榮とする處なり。其れ軍隊は國家の干城 皇室の坂塙を養生すべき所なれば、吾等は入營當日より干城板塙たる重大なる責任を負へるなり。されば軍人たるものは畏れ多くも 大元帥陛下より賜りたる勅諭を遵奉し一途に軍務に勉勵し決して違背せざる覺悟なり。曩きに日清、北

清、近くは日露の戦役に於て吾が帝國の全勝に歸し世界の各國をして震撼せしめたるは全く軍人の勅諭を奉戴し嚴格なる軍規あるに基因せるものに外ならず、入營後は直ちに中隊長殿より軍人精神の讀法を拜聴す、故に吾等は誠心を以て能く上官に服従し常に法則命令に違はず誠實に其の任務を盡さるべからず。

身には忝なくも上元帥と同一の正章ある軍服を著し頭には名譽の章ある帽を戴き聊か寒氣のいとへなく教官上官よりは懇篤丁寧なる教を受く教官の吾等新兵を教育愛撫すること恰も母の赤子を撫育する如く先輩者の吾等をいつくしむこと弟妹に接する如くにして實に恐縮感涙の次第なり。糧食の如きも軍醫殿の驗したる衛生上最も有効なる食物を與へられ余の如きは日尙淺きにも不抱今や一貫餘の體量を増加したるは只管軍隊生活の賜ものにして何の幸ひか之れに如かんや余等の家庭と比する時は雲泥の差より尙甚だしく、筆紙の及ばざる處

入營後の所感

入營後の所感

なり。然るに世に往々其の意を解す能はざる者ありて軍隊へ入營せば別天地に入りし如く思ひ残酷なる教育を興へらるゝ如く考ふるもの少なからざるは大なる誤解にして遺憾に堪えざる極みなり。今や二ヶ月餘の教育を授けられたるを以て練兵、内務の勤務等稍熟達したるにより時々刻々に興味を激増すると共に一層軍務に精勵し來る第一期檢閲には櫻花爛漫と共に目出度く卒業し模範軍人として世人の愛敬を仰ぎたき觀念寸時も胸部を離れざるなり。

第一期間の回想

歲月匆匆として早や百五十日を経過しぬ。回想せば去年十二月一日星寒の折、朝霧の中から營門を眺めた時先づ余の腦裡に印象を興へたものは二つあつた。一つは境遇の一轉變にして、他は皇室保護の任たる近衛兵たることと自信しては何となく、ほゝ笑ますには居られなかつた。

明確

劈く・痺れる。

其後宣誓式入隊式が舉行される。軍隊の居常凡ての紀律嚴肅、禮儀作法の嚴格、階級の別明劃等は此時に深く腦裏に刻まれた。乾坤一轉亦心機一轉の元朝に於て余も亦大ひに氣を吹いた。而して軍隊の平和の一面を感じた。日に日に練兵内務の事も辨へてくる従つて大ひに興味も増してくる。之れ偏へに新兵係諸教官の好指導に依ることゝ感銘して忘れない。寒風肌をつんざく候代々木が原の斥候動作に手足がしびれた事もあつた。又大森行軍の時足が疲れて一步も前に進まず遅れ勝ちの事だつた。この時は忍耐の字一つと思つた。人間萬事何も忍の一字だ。或人は團體心裡がご一のと云ふけれど吾が帝國の軍人精神はソンの薄

第一期間の回想

(正) 誤

不知不識

今後

第一期間の回想

弱なものである。吾々大和民族は先天的に攻撃精神の基礎がある。故に各個教練其他學科にて不智不識の間に教官よりそれを涵養せられ、より以上に練磨されるのである。然して日東帝國軍人の精華ある武士道は遺憾なく發揮されるのである。三千年の金甌無缺の歴史を有するも此れが爲めである。

一朝有事に際しては克く殉國大節の義をいたさん覺悟である。

昨日今日春陽は來復の野山と言はず西も東も景色は變らぬ。軍隊も楽しい第一期の難關も無事に了つた。今后層一層攻撃精神を入れねばならぬ。

夢の如く第一期間が終り、今朝、がつかりして床の中で考へて見た。自分第一期間ごんな事をしてごんな氣持で暮して來たかを思ひ返す

指導の結果 磨く 馴る
酬う 方針
當時 突撃

と、誠に月日の過ぎ行くは早いものにて入營以來最早百五十日を経過し、其間當時は故郷の事のみ聯想し居たれども、現今にては軍隊に任する事も面白相成り、且又御懇篤なる教官初め班長殿新兵係助教助手に厚き指導を被りし決果軍務に順れ、なんとなく軍人精神となり、外地方の事も思出さず、今來は益々軍務に勉勵し一旦事ある時はみがき上げたる誠心を以て國家の爲めに盡さん覺悟也。これ一つは我新兵係諸教官助子の御厚恩にむくゆる方心なり。後は今後の成行きに待つ。

我等第一期間中種々ありました。我等入營とを酒保のあくる日はなによりと思ひました。第一酒保とつげきを致しました。第一回到二十錢くらいはたべました。今日ではよくもたいらげたと申します。一月一日の朝は最も愉快でありました。家にいてもこのよをな事はありません。實に愉快でありました。其の内にも早第一期檢閲を無事相すましま

第一期間の回想

した。

入營以來既に一期間も経過した。此の間これぞと云ふ取るべき事もなく唯空しく暮してしまつた。而しながら樂しかつた事や悲しかつた事も度々あつた。先づ余の樂しかつたのは、新年宴會であつた。吾等は夜十二時に飛び起きて入浴に行き、直に各班とも宴會初まり、歌ひ舞ひなど余生れてから初めての愉快である。

次は悲しかつた事を一寸申します。或日の事であつた。いつもの如く練兵をして居つた私は第六區隊へ行つた時其の後で或るものが練兵不熱心なる爲め上等兵に見附けられ大いに叱られたのみならず酒保止となつた。其の日は丁度水曜日であつた酒保止になつたにも拘らず、三名は酒保に行きいよく教官に見附られ一列横隊になつてビンタ取られた時の心地は實に悲しかつた。又よく考へれば大いに戒めとなつて

爲めになつたと思ふ。

願みれば昨年十二月一日新兵として第五中隊に入隊せり。入營當時は古兵さんより襦袢袴下及び帽子靴に到るまで著せて頂き誓文式参列の時は帯剣のなし方を教へられ營内の情況及び軍隊生活は如何なるものなるか少しも分らず、唯古兵さんが食事番に出て持ち來りし食物を食ひ入浴の時は上等兵殿に引率せられ日用品入用の時は古兵さんより酒保にて買つて頂きながら赤子同様にて日を送り居りしが日を積み月を重ねたる今日は自分ながらも好く古兵さんが細心注意して内務上の事を教え下されし事又練兵にては右向けも左り向けもしらざるを教官殿及び助教助手殿に教育せられ今は個人として戰鬪に従事するまでになりたるは普通の御世話になりし事ではなく、自分が在郷の砌り地方人及び在郷軍人より聞き得し事とは大なる差あり。先づ一例を上ぐれば

第一期間の回想

不寝番水仕事の如き皆古兵さんが成し實に一期間は御客様同様にて日を送りたり實に上官殿が新兵に對する御心切を謝するなり。

○

吾等は新兵として入營せしは昨年の十二月一日にて月日は矢の如く過ぎ去り最早四ヶ月も経過致、今日其當事の事を考ふれば誠に小供の用にて、まず第一に服の著方又時としては大小便の世話をして貰らひし結果、今では一期も卒業して一人として戦争の出来る軍人となりしは皆是れ上には慈母の如上官殿の御力に寄るぞかし。よつて吾等は是れより益々軍事に勉勵し以て而して御高恩に酬ゆねばならぬ。

○

我れ明治四拾年拾貳月壹日當聯隊當中隊に入營致してより最早四ヶ月過ぎ第壹期は檢閲も目出度卒業し、我第壹期間の回想は斯の如し。入營當時は我家を思ひ日々心細く練兵も身に入らず何と無く心苦くあ

りましたが、中隊長殿初め教官及び助教助手の教を得、又内務班長殿及び古兵さんの教を得てより舍内の事もわかり、又練兵も面白く相成る内に早くも壹期間を過し、初年兵となり修業兵も出で内我れ修業兵とならざるを残念と思ひ、又我ながら我心をうらみ居りましたが、先日第三内務班にて教官の教訓を得、又助教、助手及び古兵さんの教に従ひて心を取直し、此先は猶進で一層心を勵し軍務に勉勵して、唯々一日も早く家に歸り先祖の家名を相續して家の再起を唯樂みにして居ります。

○

願みれば片々の和服を捨て凍しき戎衣に更しは四ヶ月の過去よりて今や櫻花爛漫の陽春を向て、我八十の戦友は新兵の名を變じて初年兵の名を得、今靜に眼を閉ちて注事を思へば、懐しき故郷を後に孤影肅然都に上りし當時は、意氣上らず爵として樂む所無く、日々の練兵も身

第一期間の回想

(正) 誤

譽 譽
ホマレ
擧 擧
アゲル

第一期間の回想

に染ず、寒月淡き夜西南三百里の故郷を抑で、兩親兄弟、さては親友の身に魂を飛ばしは、幾度なるかを知らずして軍人にして軍人の精神を宿ざりも、日々教官殿よりの精神教育尊き讀法等を修むるにつけて、如何身の任の重く如何身の名譽なるかを感せし後は、一意専心軍務に勵勉し身弱にして意を得ずば斃後止む志を持し以來は雪粉々夜間演習話に頭を病ませし強行軍も何の難とも思はず、日々協同一致の班内の動作も趣味を覺ゆるに至りぬ。

○ 昨年十二月一日心の駒をぞ〜と唯ならぬ思をなしつゝ新なる生活の端緒は開かれぬ。

願れば過古四ヶ月間に渡る吾等の生活は生涯忘る可らざる以一の範路にして精神の改善忍耐力の要成に重大なるものなり。中にも習志野行軍の如き忍耐力に供ふ自信力を増さしめ、亦戦闘の有様は斯く長途

唯一

術科

の行軍の後行ふものなるを教えられ徐ろ心の嬉れしさ。實戦に近き生活如何に興味深く過しを。而して教官殿や助教助手殿より事々刻々懇切なる教訓空しからずして第一期の檢閲を終りしぞ悦しきと、併せて教育の任に當らせ給ひし上官殿の御勞力の程、さこそ忍ばれて身の不甲斐なさを歎するのみ。

○ 然して今や吾等各個の戦闘準備はほいなれり。吁々されど自信力に供ふ實科の未だに遠きは懺悔苦惱の至るに堪えざるなり。されば今後益々奮勵して其の不足ををぎなひ併せて將來の成功を計らんのみ。

第一期間の回想

入營以來最早第一期をすこす軍隊生活も如何なるやの味を知れぬ其間には愉快なる事も悲しき事も度々ありました。第一愉快と思つた事は新年宴會を始めとし、次には野外演習にて各個炊事、其から夜間演習

第一期間の回想

にて斥行の動作などは實に面白へ。其に反じて悲しと思た事は食器洗
 に行きて少尉殿に食器を取られのみならず新兵全部整列の前に呼び出
 されて注意をあたひられ、其上に半日練兵を休ませられず其ときの心
 わ實に悲しかつた。又先頃上等殿より酒保止の有たとき命令を背きし
 者有りし爲め大に油を取られた。是れが則ち悲しき事と感ず。

油断 且 盡す

入營以來日月四ヶ月を過ぎぬ。呼鳴日月は實に矢の如くなり。先月二
 十九日及び四月五日を以て一期検閲も終りぬ。よりに我れ等も検閲終
 りたりとて(ゆだん)して宜しくあらふか。否(ゆだん)しては。なりま
 せん猶今後とても心をゆるさず勤務に勉勵し。只今より二期の検閲は
 一期の検閲より首尾能くやらんことを今より心に思ひかつ祈りて居り
 ます。依りて今後は如何なることと雖も。必らず上官の命に服従し
 君の爲め國のためにつくします。

考へて

閉口

我れは明治四十年十二月一日この名譽ある聯隊に入營した。而して今
 日まで丁度四ヶ月間、軍隊生活を營んだが、實に軍隊生活は面白いも
 のである。なるほど軍隊は時間や規律が、嚴格であるからして、初
 中は、何だか心苦しく感じたけれども、一ヶ月一ヶ月過ぎるに従ひて、
 段々軍隊の様子に馴れ、さほど窮屈とは思はなくなつて來た。が、し
 かし演習が激しくなるにつれ腹のへつたのには平降した。それである
 からして、酒保の開ける日には、早速酒保に突撃して、堅麵麩はよし
 園子や大福に目を引かれ、腹の痛むるを知りながら思ふまゝに食ひ、
 一晚に少くも二三十錢位づつ、費したのは、實に驚いた。其の時の事を
 考へて見るとまるで二三才の子供の様である。
 更に入營當時の事を思ひ廻せば實に滑稽な事がある、其の一例を擧て
 見れば、袴を裏表違ひて著る者もあれば、又寢臺に寝る事の知らない

第一期間の回想

(正) 速歩

誤

異なる 體格

嗚呼 裝用

習志野

第一期間の回想

ものもあつた。殊に初めに教らた速足行進はまるでポンチの様であつた。

吾等此隊に入營以來最早四ヶ月過し。入營前古郷に於て在郷軍人の話には軍隊は自家に居るとは黄つて班の働作と云ひ練兵と云ひ誠に凌ぎ難く全く別世界であるとの話を聞いて入つた。始めて營庭に於て體客検査を受け班内にて服を着て貰い中食には金製の食器はし湯呑之を見て呼嗚全く聞く通り別世界であると考へた、すると封筒形をした寢臺に身を腰し毎日二壯用の軍服にて愉快に練兵をする内に惶くも天皇陛下御紋の付た銃で以て助教殿に自分の子の様に愛され、毎朝服裝をなをして戴き古兵さんの話には新兵も奈良春行軍に行だこの事。軍裝をなし十里の道を行軍するには非常に苦しきこの話し三月一日を迎へ奈良春を指し行軍した。すると古兵様に聞た話程でなく樂し

熱 勃 一層

立派 業

光陰 先づ 故郷 或は

く歸營を企て。後日に於て射撃を爲す折々の夜間演習四月の二十七日二十九日を迎へ一期の檢閲もなくなつて過ぎた。月日は流水の如し。

光陰は矢の如し。吾等隊に入りてより早四箇月と成り。最早一期檢閲も修へ始年兵と相成り候が末づ新兵時代に付き吾れ入營當時は近しき戰友も成く一人にて有る日は古歸之事を思ひ。有るゆは軍務の事を思ひ居りしに、月日之立ち行くにつれ、戰友も多く出来、軍隊生活も慣れ日々増し練兵教練は面白く相成り、其内習志野行軍など致し其の内吾思出は聯隊に居る時は、立派なる寢床に付き居るが、習志野にては小さな家にワラをひきて其上に寢水はワルク便所はきたなく實に隊に居る時を思ひ出せば一時も居りたくない。然れ共吾は戰爭に行きたる事を思ひ亦戰場に来て居る者と思ひ日々の教練を決心にやりぬ。今後一會勉強致し新兵次第の事を思ひやり教練に従事するなり。

第一期間の回想

軍紀。
観念。

減ず。

第一期間の回想

今より願れば今を去る四ヶ月前頃は十二月一日なり。我等入營せしより今日に去る迄で種々なる軍事上の教育を受け又は面白き談話等も聞き厳正なる軍規をも授けられ其れに基きて我等歩兵の任務戦闘の方法等も先づ一通りは習ひ終りたり扱て是れ迄では種々なる感念を興したれども中にも重なるものは第一入營當時に引卒致され畏くも官城拜觀致せし時は實に近衛の軍人の名譽なるを感じたり。又特に愉快に思ひしは一月一日に新年宴會を催せし時は上下の別なく新古兵の別なく歌ひつ舞つせし時は誠に楽しく感じたり。次に練兵終後の腹のすきし時に酒保に走りて大福、團子、ビスケット、堅麵麩等を食すは甚だ心地よくありたり。其れ故今金錢出入張を見れば皆大福、團子に消費金甚だ多し。されども今日に至りては余程腹も定まりたれば以後は是れ等の消費を感ずる決心せり。斯く樂しき事も數多あれども又悲しき

後。

たれば。
暖き。暑き。
燠。
講評。
爛。

放つ。
散る。

第一期間の回想

事も多大のものなり。先づ揚ぐれば先來班長殿及び上等兵殿の接種をなされし時助教助手もなくして只教官のみにて練兵致されし際我第三班の同胞はふとした事よりづべらをなし爲めに少尉殿より見離されたる時は自心は今筆蹟に盡し難程困りし事もあり此時には教官殿を始め班長殿上等兵殿又班の古兵さんに對し誠に面目なき次第でした。其後も亦命令を遵奉せずして少尉殿に將校室に於て教訓なされし時は如何にも自心を咎めたり。余は各別悲しき事はなれども細かき事は盡し難し。然るに今日に至りてはかゝる悲しき事は過ぎ去りたるば此暑き春と共に櫻も目をさまし今や亂滿として世人の公評を受くるが如く我も今より此覺悟なり。先づ一期間の回想と云へば其數甚だ多けれども大略を右に記せり。又思ふやう梅を見て感ずるに寒き寒風をいとわず早春に先き立ちて開花し見事に良香を散ち人に愛さるゝものなり。されば軍人たる者は充分に忍耐と勇氣とを以て萬事に打ち勝つ精

(正 誤)

第一期間の回想

神なかるべからずと深く感じたり

一生懸命
駈歩
ますから

○ 早や入營の後四ヶ月にも成り第一期検閲も終りましたが、これまで一生懸命に教い下され何にとも御申譯がありませんが、一番困難に感ずたるは此の前代々木聯兵場より駈足致せし時は一番に困りましたが、若し敵と戦闘した場合に於て是非其の地まで進むに當る場合には困りましから常に此の駈足を練り置かねばなりませんから、能く困難に耐ゆる心を以て居らねばなりません。又私は射撃は下手であります。軍隊は射撃は下手であつたら敵を多く撃と云ふ事は出来ませんから、此の射撃を上手でなければなりません。もし戦争の場合には何如程射撃上手でも其心の固からでは却つて下手の人におどりましたから、義は山嶽重く死は鴻毛よりも軽しと心懸けて國に報ゆるの心無くてはなりませんから、常に能く心を練り、上官の命に従ひて何に事も背かず

盡す心
穿く
練兵すると
教へ
愉快
辛い
困る
振る
狭い

○ 盡し心懸なくなつてなりません。然し入營當時何も知つたものない服を着る事を知らず、服を着ても便所に行きて袴を取る事も知らず、靴をはく様も知らず、何に一つとして知つたものはない知つたものは食ふ事ばかり知つて居つて、練兵すると腹が減るから酒保に行く大福團子を食べる事ばかり知つて居るのを一つ一つ教い下されて今日様に漸く軍人の形と成りたるは實に有難い次第であります。

○ 我等は十二月一日に入營致してより二月二十一日に大森行軍の時に品川にて初めて海を見る事ができました是がゆかいでありました。自分の最もつらい事は人より練兵できないで又手がふれないうで非常にこまりました。習志野の二番家にて舍營した時にせまいのこまりました。外につらい事はありません。

第一期間の回想

(正 誤)

光陰くわういん。耐ゆた。
軍紀ぐんぎ。

空包くわうぱく

想ひおも。感ずかん。

第一期間の回想

入營後光陰矢の如くに風車めぐるご共に過ぎて最早百二十余日を経ぬ其間は寒氣烈しきにもたい兼ねて嚴肅なる軍規のもとにありて又懇篤なる教官に練兵を教へられ常に體を鍛へられて居る爲め二月廿一日の行軍なども軍装にして、池上村本門寺より大森品川邊を進軍し其内斥候の動作をなして約九里の道を行軍して歸營するも一人の落伍者もなく、されば新兵として感じ想ふ亦三月一日の習志野行軍をなして習志野原にて四日間演習をなすも散兵、夜間の歩哨の動作をなすも、廣き原にて夜間には空砲など撃ちて演習をなして六日を以て歸營するも以て欠員なく返りて顧みれ實に之れ實戰の如くに想ふ。

斯の如き原にて演習をなしたるは我等軍人して希望なれば廣き所にて練兵なす好む、檢閲も新兵一名欠員なく受けられたるは實に喜ばしく想へ感ず第一期を終れば第二期も一期の如くにならんと想ふ。之よりさきは尙々軍務に勵み上官の命令に服従し以て國家の爲めに身を

投じ以て君の爲め盡さんと想ふ。

○

願れば入營以來月日の小車はめぐり／＼て最早百二十日の長い夢は消去つた。忘れしない去年十二月一日は前日より雨降り續き居る中から營門を眺めた時如何たる感が起きたか境遇の一變には稍々淋しさを感じたが、然し國家の干城と自から信じてはほゝ笑まずには居られなかつた。

其後誓文式が擧げられる、入隊式を行はれる。軍隊の嚴肅は此時腦裡にきざまれた。其れより萬物皆新なりし元旦に於て余も亦息をふいた。そして軍隊の平和な一面を感じた。夢中に過した其日其日も重なれば軍隊の事も少しは辨へてくる。面白味も増してくる。然し大森行軍の時は疲れて足の一步も出ぬ時もあった。此様な時は實に軍隊は忍耐でやり通さねばならぬ物と感じた。しかし春陽は來復した春の景色は西

第一期間の回想

刻むきざ。

忠義

第一期間の回想

も東も變らぬ物である。軍隊の春も亦實に楽しい。第一期検閲の難關は無事に了つた。

我此後は益々軍務に勉勵致し國家忠儀盡す志なり。

余等入營以來最早や、茲に四ヶ月を經過したので有る。なる程一期間の中には苦しき事も有れば樂しき事も有つた。週番上等兵殿から突如姓名を呼ばれて書面を受取る時の心地は實に嬉しかつた。殊に、はがきも封書も同じ物で有る哉封書で來たる時などは自然肩身の廣い様な氣がする。直ちに封を披いて讀んで見たいのは山々で有るが、わざと其の儘、ポケットに入れて練兵時間の休憩に一寸と物の蔭で披いて讀んで見る時の樂しさは言うに云はれなかつた。又は獨歩外出を許されたとき、上官や古兵さんに親切にされた時などは實に〜に嬉しかつた。又は教官に注意を受たことも有つたが、それは云はずに置かう。

兵營生活は樂しいも苦しいも唯 陛下に對する忠誠日本國民の負うべき義務の觀念此の二つに集中する精神の如何に依つて判別されるので有る。國家の干城として大なる名譽を荷うからには草を枕として露に打たれ雨に打たれ炎熱燒くが如き日の野外演習や其の他營内の諸勤務等幾多の困苦欠乏と戰ねばならぬで有るから、吾等は今後益々奮勵して是等すべての難苦に打勝つて行かねばならぬ。

月日の立つは實に早きものにて我れ昨年十二月一日入營してより今日迄で早や四ヶ月を暮し、新兵の第一期も愈卒業したり。入營當時の事を顧みれば自分で自分のなしたる動作が、おかしくてならない。始め入營せし當時は上官と行き遇へば何んそなく身が鐵棒の如く固くなりて、二十間位前より手は敬禮の準備をして振らずに待ち居る。又始めて單獨外出せし折りも前の如く殊に服裝検査の際に於て敬禮の

笑はむ、
給へ。

第一期間の回想

事を特に注意されるを以て市中を歩るきながらも、若しや上官が來られやせないかと後を見横を見て折角樂しき日曜の外、出も身は束縛されたる感して誰れにも新兵たる事の一目瞭然であつた。又練兵に在りてもすべての動作が石地像の如く固くなりて中々ウマクならない又上官から物を尋問されると心には好く知りながらも其れが口に云ふ事が出来なかつた。實に今日より入營當時の事を顧みれば我れながら笑わざるを得ない。又同縣人の者を頼みに訪問しても懐かしがつてはくれるが只シツカリヤリ給る眞面目にやり給るとばかり云ふて外かに何等の要領をも教えてはくれない。併しボヤ／＼して居る内にだん／＼日が立ち月を経るに随ひ内務の事情も好くワカリ又演習も可なりうまくなり、愈々茲に第一期を卒業する軍人として戰場に臨み得る今日に至る。

第一期間の回想

定かに覺へはないが二月の始頃であつた下士官や古兵さんの腸窒扶斯豫防接種があつた。此日新兵は少しの行軍があつた其内で第二内務班の下條と自分は看護を命せられ營内に残つた。夕方に新兵は全部歸營した。自分は班長殿の様子を尋ねた。此時分班長殿は發熱甚だ敷く頭の邊よりは汗が流れとつ／＼と湯氣の様に立ち登つて居て如何にも苦しうな風に見受けられる。班長殿如何でありますかと自分は尋ねた。勝屋最大丈夫だと言われたが、其聲も苦しげに聞へた。勝屋新兵は皆入浴は終つたか、早く武器の手入を終つて入浴を終る様に言へど。此時急に自分の頭は熱した。そして兩の目は涙で曇つた。あゝ有難い此言の葉直に班に戻り此の由を傳へた十五分乍經て又伺ふた。前と同じく御心配である。勝屋新兵は皆入浴したか。再び我頭は熱した。呼鳴班長殿の御心置只に一朝一夕のみならず、御身床の中に苦しみに在せごも吾等新兵を子よりも愛撫せらる。

藤然

ければ、唯
甚、或は

第一期間の回想

家に在つては父母兄弟の慈に甘むじ、入隊しては中隊長殿を始め上官の深遠不朽の御恩澤に浴す吾等が幸福又如何ぞや。何を以てか之に報ひん、他なし益々艱苦勉勵筋骨を練へ他日滿州の野に我腕力を打ち揮ひ以て御鴻恩の萬一に報ひ奉らん聊か所感を記し前途の決心之れを以てす。



○
思へば明治四十年十二月一日徴兵として名譽ある此の聯隊に入營す。早四ヶ月を過す。最初の中は何より何迄は少しも分ならず。只蒙然として日を送るの己なりき。然る二月初め頃より漸く班内練兵等の動作を覺に實に面白く成りしが而し軍人精神にまた熟さざるか忍耐力に乏しくして困難に勝つ事少なかりけれしが、中間より多太軍隊上の事は面白く習志野に有り練兵の中の如きは實に愉快にして直行進散開或は歩哨斥候などして廣々とした平地にて動作するのは恰も梅花の散る

監視區域
小哨
與へられ
頃合
激寒
堪ゆ
寢臺 枕
一天萬乘

第一期間の回想

如く思はれ至極く期間中の愉快なりき。又前なるが二月初め頃に夜間演習前日より降り續きたる節雪地をうづめ深さ五六寸程も有り寒風涼々として肌を通す計りの寒さ又もくく降りくる中を午後五時半頃演習の整列にて代々木練兵場に至り或林中に在中歩哨斥候の動作待別守則は敵の方は衛戍監獄の方向に在り歩哨監守區は右は彼の方左は御領地の大かと迄特に監守す所は此の道路此の歩哨は前哨第十中隊第一尖哨より出たる所の第六下士哨にして右には第七下士哨左には第五下士哨下士哨とくこの連絡は動哨をなすなどこの守則をあたいられ愈夜は更けて敵と相對す頃をえには手はつめたたく着たる外套絨衣はぬれ通寒益烈しく實に凌難き時は軍隊はかく程勇壯なるかと思ひ氣を留めこらいたれ共實に一期間の難山なりけり。又其れと思ひ歸營す見ればシン臺はさも暖かソーに待ち受け尻を先に入頭をまくらに上げたる時は一天萬上の樂となりし心地せり。其の後其の前數々面

第一期間の回想

白き事又困難なる事も多かりしか先一期間中に右の如きは大回想なり

○ 願は朔風肌を裂き草木枯凋四顧蕭條たる故山の景を後にして意氣揚々上都の途に就きしは既に四ヶ月の昔となりぬ時を得顔に獨り暴威を逞ふせし寒氣いつしか去りて花笑ひ鳥唄ひ若草萌え蝶舞ふ和氣霽々心神爽快なる春を迎ふ夢と過ぎし日月なれど此間教官助教の熱誠なる指導教練を受くること數ふれば實に半歳に垂んとす既に新兵教育を終り天晴れ一兵卒たるの技能を具ふべき時期となりしなり然るに余や愚鈍にして何の得る所もなく空しく隊内に寄食す思ふて此に至れば只愧然として事の出る所を知らざるなり然れども我も亦國家保護の大任を負ひ名譽ある軍人の一人として郷里の空を辭し來りしもの豈茫然として日月を空費すべきの身に非ざるなり資性の頑冥は意のよく矯正し得べからざる所之を悔ゆとも如何せん宜しく軍人の精神たるべき勅諭

第一期間の回想

○ の御旨趣を奉體し一意上官の命に服し飽まで職責を奮勉して軍人たるの體面を保つを期せざるべからず 遡りて入營前の豫想と今日起居の現状とを對照すれば座ろに無限の感慨に堪へざるものあり只入營當初の諸事不心得の結果多少の過失を免れず從て不愉快を感せし事もありしが日を經月を重ねて今日に及び難なく第一期間を終りて第二期の途に入り事の習熟と共に日々に快樂を増し元氣を加へつゝあるの佳境に臨みぬよし今後益此勇氣を鼓舞し堅忍不拔事に當らば如何なる艱苦も敢て意となすに足らず來れ困苦缺乏聊過去を顧み將來の所望を陳べ間に應ずるのみ。

明治四十年十二月一日入營して師父の如き下士官あり慈母の赤子に於けるが如き下士官あり又兄弟の如き戰友ありて恰も一家團樂するの思ひ有り候ため無事にて一期間も卒業致し最早一人前の兵卒と相成たる

第一期間の回想

其後一朝事有際には三八式の歩兵銃剣を持ちて身命を擲ちても報國の大義を盡すべしと思ひ思り舎内の事も尙を一増勵ますばならんと心得居り候

するとき。

光陰は矢の如く生等入營以後已に四ヶ月を暮し即ち服役中最も大切な新兵の第一期間は去りたり。今日に至り入營當時の有様を回顧すれば入營翌日より窮屈なる軍服を身に着し朝より各個教練にて日を暮し稍を拂ふ北風は遠慮も無く我々新兵の肌を刺し、其の中には古兵の行進等度々見る事あれば我等も早く此の如くになりたきものなり。斯く成る迄は何時なるかと思居たりしが今や已に一期は終れり。風止み空晴れ星明かに月清き或る夜。日夕點呼も過ぎ戦友も寝ね中隊内は何の物音も無く静かになり余も善き心にて眠らんとするとき、俄かに騒々しき人聲起り各人の番號は幽かに聞へり。察するに何處の中隊かは分

働く、動く。

加へし。

餘る。操法。

第一期間の回想

らねども不時呼集なる事判明せり。余は此の物音に妨げられ眠らんとせしも眠られず此の時始めて思ふに入營後恰も小供の如くになり酒保に行きて大福園子を買争ふなど云ふは愚なる事なり。此の前靖國神社に參拜し予でに遊就館に入り陳列品の多き中にも我々の日々手より離さざる三十年式歩兵銃のさんくに壞はれたるを見たる事を思出し先輩の日露戦争にて如何に苦戦せられたるか、此の如く銃器迄が破損したらんには此れを持てる兵士は定めし骨も残らず打碎かれたるならん。先輩の忠勇義烈なる事は想像に余れり、斯く探く思ひ出せば夢の如くに我等の日々教授せらるゝ銃の操方や銃剣術や目前に現はれ、此の如くにして先輩は鍛ひ上げられしか、而して己が本分を全ふせられたるか、余も幸にして軍籍に身を冷加せし以上は如何なる烈しき演習にも打勝ちて善く身體を練り勉強し今後有事の時は先輩に耻ぢざらん動きを成さんと、今より心懸けん。又現在我等は如何なる寒氣と雖も

第一期間の回想

一定の衣服を着け或る定時刻迄は動き如何程空腹なりとも制限の食物にて満足し忍耐心を養ひ何事も協同一致し頗る立派なる軍隊の習慣を今より善く心懸けて身に慣はし除隊後といへども此れを身より脱せしめず、地方の少年を導き衆人に先て善を執り事を成さば獨我身の幸のみならず地方の人々は如何に喜びなむと感せり。

○
顧みれば昨年十二月一日入營し最早日月も過去り余は入營後も唯だ何となく老父母のみ心に掛りて畏れ多くも陛下の公務に冷淡であつた罪の報ひであらう。一時は兵營を涙の谷とまで観する迄に心の苦しみを受けた事もあつたが、住めば都慣るゝにつれて迷ひの雲もいつしか晴れて漸く兵營生活の快味を悟るに至つた。今その所感の一端を記す。即ち私交の階級なく公務に於て上官則陛下である故に練兵上に於てこそ汝切腹せよとまで云ふ事もあれど一度び班内に歸つての私交は

鴻雁(鳴)

受くる。

思ひし。

○
誠に打ち解けて嬉々として語るのは軍隊の特質ではあるまいか。然り練兵場を戦場とすれば班内は家庭である。

光陰は矢の如しとは古人の金言なり。最早鴻雁辭し去り飛燕之れに代る時節となり吾人は今茲に一期の檢閲を無事に終り二期の練兵教育を受ける事となれり昨年十二月二十六日父母の膝下を辭し入營以來百日を過ぐ、嗚呼月日の去るの速かなる哉回顧す入營當時は營内の様子は分らず又生活も故郷と違い練兵教育を受くるにも身體は馴れざる爲め軍隊は實に困難の處と思ひ國家の干城たる重大なる任を持つ身にありながら、寢台の中にて涙を以て故郷を思ひ事もありき。一週二週を経るに従い様子は分り生活には馴れ友の名前を知れ來れば身の曇りは何時しか晴れて一日一日と楽しく實に一家庭と思ふ様になりき。中隊長殿の萬事を督せる事吾家にて父の家を督せると同じく、班長殿の班内

第一期間の回想

の事又吾等の身体の事迄御世話下さる事母と同じく古兵諸氏の日々愛撫し下さる事兄と異なる處なし班内にありては皆心打ち分け愉快に交り掃除其の他の仕事にありては皆協同一致して事を致す等、故郷にて兄弟と云ひ雖斯く一致することは覺束なし。然も其の内にも階級の別は明にして禮儀を重し少しも上下の別の亂れざる事は軍隊に非ざれば見る事得ざるべし斯如き樂しき家庭に居し練兵には教官始め助教助手諸氏の熱心にして懇なる教を受く。然れども余は如何なる偶人か術科は熟せず學科は進ずされど光陰は反對に速かに進み一期を夢の如く送り今や初年兵と成る事を得たり。嗚呼回想すれば一期間を夢と過せり。然れども戰友は充分の勉強の結果今や修業兵となり特別教育を受ける事を觀るに付、過去一期間を無意味に送りし余は嗚呼國家を直接保護する軍人たる身を思せば回想するに付今迄の不覺を悟る事切なり過去は追ふを得ざれば二期よりは大に勉勵し天晴の軍人となり 皇恩の萬

進まず。

一に酬ひ奉つらん。

○

余等入營後最早や四ヶ月の星霜を経ぬ。回顧すれば入營當時は東西をも辨せざる余等なるに種々の御教育を受け一日に學術科は進歩し、營内の狀況も限なく知るを得、去る二十九日を以て第一期檢閲に首尾よく卒業し得たるも是れ皆教官の御懇篤なる御教育の余澤に外ならず軍人として平常最も尙ぶべき淡泊に付き所感を記さん、月日は忘却せしも同輩なる菊永某なるもの悪行爲ありし際、少尉殿より菊永へ對し一同へ御訓戒ありし後、成山金三を先途として菊永は一同へ不注意を詫びんとする際、列兵の笑ひしたため余も何意なく笑ひたり。然るに歸班後班長殿より取り調べに及び余も笑ひし旨申述べし處班長殿より非常なる御叱責ありたり。早速少尉殿へ申上げし處班長同道來れどの御言なるを以て心中定めし嚴重なる御譴責あるものと信じ恐る

餘澤。

後。

第一期間の回想

咽ぶ

愉快

第一期間の回想

班長殿の御同伴を乞ひし處自分の正直に自白せしをめで少尉殿に於かれては意外の御淡泊にて何の御責めなく直ちに其の罪を宥されたり。余は余りの御淡泊に感じ喜び只涙にむせびき。聊か新兵時代を回想し思ひのまゝ記す。

余は明治四十年十二月一日を以て當聯隊に入隊す。最初入營當時は上等兵殿の引卒を受け入浴場及炊事場其他酒保便所等教へを受け又初めは状袋の如き寢具に入り方迄教へられ、實に赤子同様にて日用品を買ひに行迄上等兵殿の世話を受け、尙初めの内は軍隊の食事及寒さに慣れぬ爲め苦しく思へども、又愉快なる時も有りたり、日を過ぐるに従ひ内務の諸動作及寒さに慣れ最早一期間を経過したれば今は非常に愉快に思ふ尙身体も益々健康になり嬉しくなれり。

關節
速歩

引卒

私入營したる當時は里に居りて幼き時より強く農業をして居りたる故に手足又肩の間接が堅くして速足行進其他の動作が出来ずして區隊長殿に御世話を受けました毎日朝早くより徒手体操又機械体操を烈くしたる故身体が柔軟なりて日々其の動作が進歩して目出度く第一期間を無事に卒業したるは皆教官區隊長殿の丹精よりたるは有難く感じて居ります、私の思ひでは二ヶ年現役中一日も練兵を休まずして勤め様と思ひて居りましたが僅に一期間中に十日も練兵休をするとは悲しき事と思ひ居ります。

回顧すれば最早四ヶ月餘を過ぎ第壹期間も無事に卒業する今日とはなりぬ。昨年十二月父に送られ入營の當時を考ふれば恰も一二才の小兒の如く戦友に世話を受け夜に至れば床を延べ伏する迄に入浴の如きも班の上等兵殿に索卒せられ食事の如きも食る迄に又班長殿や教官

第一期間の回想

悟る。論ず。

限り。斗り。

第一回の回想

助教助手殿に手に手を取り父母にも出来得難き御教訓の基に追々に隊内の動作も幾分は覺する様になりき。余が軍隊は最も辛難なるも最も面白きを記せん。難苦なるは今を去る一ヶ月餘の當日である。其れは靴傷である。靴傷は其れ程と班の上等兵殿や以下の兵隊諸君に氣毒のもので且つ練兵休と云ふものは辛らきものは實に思ひ論つた。且つ最も面白く又小兒然とせるは野外の各個自炊であり思ひくく白米と手鐘とを携ひて其の場に至らば其處適宜に選り穴を穿ち又薪木を拾ひ集める様は余軍人の快樂と思ふのである。

○
憂き事の尙此上に積れかし斗り有る身の力試さん。又艱難汝を玉にすと。噫宜なるかな、我等は昨年十二月一日新兵として當聯隊に入營しあらゆる艱難と辛苦と戦て初て古參兵となり有階者たるを得樂天地に入る。曉を見るにあらずや。今熟々回想するに昨日迄慕かしき故郷に

兩親の下。

擔ふ。背囊。

敵陣。扶翼。斯かる。欺く。汚る。碎く。

有り慈愛深き兩親の本に掌中の玉と生育し何不自由なく柔弱に生活し、今や突然此嚴格なる軍籍に身を投ずるに至り住慣し故郷を後に當聯隊の一新兵となり和服を軍服に換へ足には履き慣れぬ重靴を穿ち、肩には名譽ある皇室の御紋證の付したる三十年式の歩兵銃を擔ひ、腰に帯びたる軍刀背に負ひたる背のう一として故郷に在りし時と異ならざるはなく從て其日々の仕事は鋤鋤を手に田園に歌ふに有らずして一旦緩急あれば身命を捨て戰場に現れ敵陣に突入し銃劍を揮て強敵を死に至らしめ平時に有りては國家の干城となり以て天壤無窮の皇運を不翼するの任なり欺る大責任を帯び何ぞ一日たりとも安閑として此日を送るを得べけん哉。何んぞ強敵を汚ちくに艱難辛苦ならざらん哉。左れば我等軍人は此の強敵を壓迫せんが爲に家を忘れ身を忘れ一意専心嚴格なる軍務の基に立働き或は困苦耐難き事數々あり、或は悲しき事あり又愉快なる事もあるなるべし。例へば猛然なる戦に血汗を拭て敵

第一回の回想

(正) 誤
占領

制壓

動作 養成

急

到來 檢閲頗る

第一回の回想

壘に突撃し之を戦領したる時の愉快さは又筆管の盡す所に有す。我々新兵も入營當日より新兵として云はれ父の如き中隊長あり祖父の如き教官あり母の如き下士官あり兄弟の如き战友あり朝に銃剣の術を修め夕に機械体操に身を鍛へ今日は敵を整壓する射撃を行ひ、明れば野外演習にて斥候の動作に日を暮し歸れば舎内の動作に軍人精神を養生し一刻として究ならざるはなかるべし。然るに思ひ廻せば余の入營したる時は四十年の暮つ方北吹く風の身に染むる頃なりき而して日々の練兵と共に時候益々嚴寒に入り扱ては白雪光々たる中に幾多の酸辛を甜め、今や新兵の一期月なる四ヶ月の星霜は夢の様は過去つて梅花爛熳として營の聲聞ゆるかと思いつるに何時しか庭前の櫻花綻び野邊には千草咲に初め水清く山高き長閑なる春日正に至來し同時に我新兵の一期の檢閲は頗り良好に終りを告げ、既に一人前の軍人たる初年兵となりしなり従つて其責任と覺悟とは勿論又我等の兄弟たる古參兵は早や

二歳 繼續

一層

共友 朋友 何々と共に

二たと世の間に武を練り勇を磨き來る頃は目出度國家の義務を盡し除隊する事なれば我等は之を経續するの任に當ると同時に又來る年の新兵を教育するの位地に立つのである左れば萬事に付古參兵の好き美風を習ひ惡を退け尙一會勇を揮つて益々軍務に勉勵し善良なる一軍人となり軍人たることの名譽と價值とを完全にせざるべからず。

○
兵營生活茲に四ヶ月を閲しぬ。其日數僅かなりと雖も日々夜々銃と劍とを共とし忙しく且つ變化多々困憊酷寒身心に泌互れる等過去經驗多き所慥かに後來に於て思出多きは一生中此四ヶ月なるべし。
入營當時には室内の構造備品等何となく沈鬱殺氣に滿ち先輩諸氏の笑聲甘語も常人と異なり四ツの窓は各室に光を送る空隙かと思はれ殊に銃架に列る一連の銃は余等の生命、伴侶、神魂にして異日殺人の譽れを購はしむる武器かなど萬感交々其日の赤の飯は生死訣別の印に非る

第一期間の回想

第一期間の回想

なきや自ら箸の運速かならず喰殘せしも今日となりては奇しく愚かの極みにして惶懼の念去り舎内は軍隊の家庭なりとの意も了解するに至りぬ

叫喚 劍戟

某日雪深き所堂々たる隊伍を整へ代々木練兵場に行軍せり水無橋に至れば時已に暮色蒼暗雪愈滋し見渡す限り皚々たる廣平野莊嚴にして凄愴雪を蹴立て、進む様擬視敵人に當り追撃急にして心魂熱し敵を避けて雪中に埋まり喚叫萬響劍戟を交え氣息決せし所遠く滿韓の曠野に御國の榮譽を争ひし昔日の觀もかくやと思はしめたりき
習志野行軍の恐ろしきことは毎々耳にせし所なりしも實際は思半ばに過ぎりき唯奇しくも亦苦しかりしは夜の牀なりき平均疊二枚に六人位殊に横木を抱いて臥せし所の如き押付けられて寢返りは勿論出來ず胸苦しくて睡られず折しも隣邦に境界争あり喧々囂々決せさること久し依つて不肖己が苦境を述へて以て兩者を解けり兩者尙痛苦を去る不

勞思 廉恥 謙讓 萌す

能して而かも其心を解きしは何ぞや内に嘯、恥心、讓畔の念非せしに依るなるべし

若し閑日を得て回想筆を動かさば其停る所を知らざるべしと雖も朝夕勤めあり聊か一端を述へて我責を塞くのみ

○ (以下中隊内に入倉者を出し) (たるべき所の感文なり)

顧れば昨年十二月一日の事、祝すべき入營の途に上り、父母兄弟の膝下に介抱せられたる余、袖を別ちて不幸か幸か、固より公私の區別は知れども、情に脆き余は入營後も唯だ何となく父母兄弟の事已而、心掛りて畏れ多くも 陛下の公務に冷淡で有た罪の報ひであろう。一時は兵營を涙の谷とまで観する迄に心の苦しみを受けた事も有た。住めば都、慣るゝにつれて迷ひの雲も一とか晴れて、漸く軍隊生活の快味を悟るに至た。先づ公務と私交。大に叱り大に愛するは軍隊である。則ち私交の階級なく公務に於て上官則ち 陛下で有る。故に練兵上に

第一期間の回想

何時とか

(正) 腹。 誤)

整へれば、
涵養。

憂々。

第一期間の回想

於てこそ汝切腸せよとまで云ふ事もあれど、一度び班内に歸つての私交は誠に打ち解て嬉々として語るのには軍隊の特質ではあるまいか、然り、練兵場を戦場とすれば、班内は家庭で有る。然るに年は皆二十一、二、三以上の者が厠園の注意迄で受るは遺憾とする所なり。今後清潔なる様注意せらるゝ次第、次に服装を整いれば心正しと言れたが、始めは軍人精神は函養せらるゝのである。誠に兵營に入りて陣營其の整頓服装敬禮の如何に嚴格に實施せられつゝあるか見よ。更に兵營城外兵卒の三々伍伍歩武を齊一にし憂々の音を立てつゝ濶歩の姿勢の如何に規律正しきかを見よ。之を世人に比して孰が不法たる。私も此頃風紀の重んずべきを知覺したのも一に軍隊の賜物である。次に不寢番消燈後四隣寂寞の時、靜に各班を巡視し戰友と共に木銃を握りて戰友寢冷を防ぐ爲めに、終日の勞を疲れたる兵卒の露はした肌を寢具を以て覆ふは不寢番の任務で有る。然しながら時節柄、暖氣の爲か眠を押

起因。

へつゝ立つも是れ復御國の爲、吾々相互に此の慈悲なる任務を勤め勤るで有る。遠く郷里を離れて、兵營生活頼むべきは、上官と戰友で上官を父母とすれば、戰友は兄弟にして、我軍隊の美風は忠節禮儀武勇質素服從廉恥の如き徳義上行爲を特に軍律上に勵行せしむる事である。我等一朝事ある際、生を捨て蒼生の安きを計るは必ずしも武力のみでない。平時軍律上精神修養に依りて無我の境に悠々自適するに基因するではなるか。然り軍隊は陛下に御奉公の忠を盡さんが爲の精神修養の一道場である。斯の如き嚴正な中に我が兄弟とも依頼すべき長崎と横濱と入浴場に於て右の事件生じたる故は如何。二人の不名譽のみならず、譽ある當中隊の不名譽のみならず、聯隊に及ぼす。是れ實に遺憾に堪へざる次第、復班内の諸物品紛失する有様、舎内監視を置き警戒する軍隊生活と思はれず、右の悪習慣を早く除き、中隊一同新古兵の區別なく圓滿にして供に難苦生死を同ふし、戦備に供し、

第一期間の回想

第一期間の回想

余等修業兵共一同率先躬行し、善に導き日本兵の價値を上く事希望する。依て一筆を認め余近來の所感とす。

余が入營以來我が第○中隊は能く上下心を一にし、勅訓の御趣意を遵奉し、命令規則を嚴守し、諸勤務演習に勉勵し、新參者を慈み、古參者を敬ひて、蔭日向なく内務の規定を守り、上官には能く服従し、誠に一家庭の如く、和氣霽々として、益々中隊の成績を揚げつゝある所に、近來實に面白からざる出來事あり。誠に痛嘆の至りに堪えぬ次第である。

事の起りは實に些細なる事にて、戰友の長崎が古兵なる横濱様に入浴場に於て靴を履かれしより、何れも中隊の者なりとは知らずに喧嘩起りて、長崎は右足を負傷し練兵休患者となりたれば、事重大事件となりて横濱様は遂に重營倉に處せらるるとは、噫何たる悲運なるや。之れ

協同

は實に其の一人一身の不名譽のみならず、實に我が中隊の不名譽なりと思ふ。又該事件の原因する所か知なれど、其の他にも處罰を受けられたる者もありとか聞く。其他近來非常に物品の行衛不明が多くなる是れ等は實に面白からざる所なり。此れでは未だ中隊の共同動作が充分とは思われぬと思ふ。此の後は愈々益々禮儀を守り、能く協同一致して、他の中隊に負けぬ様、各人が努力奮勵して、中隊の名譽を揚げざる可からず。

消燈號音は隣に聞へぬ。昨夜夜間演習の勞に早くも戰友盡く寢に付きぬ。自分は僅乍り爲す可き事あり、眠氣を押へて少尉殿の居室へと尋ねた。少尉殿は外出せられしにや不在なり。外には勿論人もない。獨り椅子へ腰を下して、机に向ひ日誌の一節をぞ讀み始めぬ。机の上の枕時計は絶間なくきち／＼繞りぬ。其拍子の面白さ幽しさ何

第一期間の回想

第一期間の回想

とも云へぬ感情を添へて漸に眠はまごろみぬ。

「突然汝の罪なり汝等の責なり今中隊に續いて起る激浪は之皆汝等の罪なるぞ汝は之を如何にする」斯く責められて已は言ふ可く爲す可き道を知らざりき。天を仰ぎ地に伏して穴あらば入り度様の心持せられぬ。

「再汝の罪なり汝等の責なり汝等茲に中隊の榮譽を汚しぬ」續きく「責め立てられ、今は殆ど窮し果てぬ。止むなし。他になし。我の罪なり。萬止むを得ず、銃架に日頃愛撫し置し銃もあり、整頓柵の下には、鋭き氷の刃あり。よしと思は一途に定まりぬ。心決して立んとす。此一切那「待て〜暫く待て汝一言言ひ聞す可き事あり」と。不途天を仰げば、遙彼向より神の在す有り。余は只低頭教の程こそ待ち居りぬ。「汝よよく〜心を落ち付け余の言を聞け、汝今中隊の風波を身に負ひ責められて些細の事に大義の重きを知らず。徒に命を捨て不忠不孝

消ゆへん。

協同

の悪名を、末世迄も残す可きや。汝の命を捨つ可き途は何處にあり。狂氣せしには有らざるか。汝は如何に心を固めしや。他日滿洲の野に屍を止めんと誓ひしに非ずや。今一朝の露と消え可き時期なるか。心静に物を辨へ前途を思ひて事を處す可し。聞き居て非るや、汝は机の上の時計の繞る其節を。元は幾數十の各個區々たる金なれど心一途に集りて組み立ち行かば、彼の如き幽しき音をも面白きあの節をも聞かる可し。之も一朝一夕に出来上りたる物ならず。若しや一度其共同を失ひて、機關に故障を生せんか、繞は止んで用をせず。一度油を失せんか、器械は摺れて繞られず。浮世の風も斯てこそ、軍隊風も斯てこそ。今中隊は一期、二期の檢閲も無事に濟み、自然心も氣も倦み、果はある可き今の境遇。之れ共同動作が失せ初め、油も失せて機關に故障を生せしなり。茲に新に油を注ぎ、機械に手入を施さば、如何にか舊に復さん事やあ

第一期間の回想

不圖

和解

第一期間の回想

此處の道理を噛み碎き、事を處す可き物なるぞ」云ひ捨て姿は失せにける。廊下に烈しき物音と奇異の思に目を聞けばあたりは以前變りなく、机の上の時計のみ、節頼母しく聞へにけり。

嗚呼今のは夢なるか、夢なりとせよ。正しき道は茲にあり。眞に悟る可き神の御仰せ、不企時計を見れば、既に十時は過てけり、道に叶へる奇異の夢。見たは儘こそ書き綴りぬ。

余は入營當時は赤子の如く様子の知され共、班には母の如き班長あり、又兄弟の如き戰友に導かれ、早第二期も終て、今では諸勤務に服する同事に、一つの過失も無き様の注意せねばなりません。然るに六月六日演習出場にて一寸の事より我等が誤りを起して、教官に注意を受けたるのみならず。助教助手に對して實に面目無き次第である。又其同事に近來注意せられながら、一風紀亂れて、上下の和會を失ひ其

持つ

弛む 穿く

結果、重營倉に處せられたる者、是等は實に中隊の不名譽と考へ、以後は皆協力一致して一家庭の如く、圓滿なる生活して一朝有事の時身命を投げ打ちて國家に盡さん事を我望む所なり。

此頃は非常に舍内及び入浴場にて靴が變つたり或は無く成りたりするは是れ各人の不注意なり。回顧すれば少し前迄は新兵と云はれたる我々も漸く第二期檢閲も終り、又細密檢査等も終りし爲め、各人は先づ善かつたと思つて氣をユルメタに外ならずと考ふ。然し人の靴をハクとは最も精神上宜しからず。是に舍内にて無く成るのは短靴に多し。何となれば編上の下りて居る者は一寸履き悪き爲め、便所等に行くにも、直に人の靴を履く様な事から間違が多し。是れ一つの原因となる。又入浴場にて變るのは人の以て居る善き靴を自分の物にしたいと言ふ精神より成る。是なれば後に残る靴に善き品物がなし。是れ最も憎む

第一期間の回想

願れば。

第一期間の回想

べき點なり。此頃の事も此の理に近しと自分は思ふ。則ち官給品と云ふ念が少なければなり。欲を捨て、義を思は、斯の如き事も少なからん。是れ小なりと雖、最も軍人の耻辱なり。謹むべし。將來は各人が注意し、又數人が協同一致して、必ず一人を監視に置き斯る事の無き様に望む。

願見れば明治四十年十二月一日、忘れも出来ぬ我々は新兵と致して聯隊に入營致したので有る。然るに日は流水の如く流れ去つて、茲に百五十有餘日過去致したので有る。百五十日と云う日は一日の如く一家團樂にて何て失態も無く、一年兵は能く二年兵に服従致し、二年兵は一年兵を良く慈しみて、過して來たので有る。然るに四十一年六月八日は我々に取つては如何なる悪魔の廻日で有つたらう。少しの事より某人を見るも、驚く可き暗牢に著のみ著のまゝにて、飯には僅か菜

罪を霽らす。
戒む。
名譽を發揚す。

と致して鹽のみで有る。嗚呼此の中にて日を送させると云うのは實に我々の協同一致が足なかつたので有る。嗚呼この某に對して如何なる詫を致したならば、よいで有らう。然し一方より考うると兄なりとも斯かる罪出したる上は此の罪を晴らすには居かねない。我々は此事を手本と致し今後また協同一致を致し、惡をいましめ善を勵み、以て聯隊の名譽を發起せねばならぬ。かゝる事が今後有つては日の本と云う二字に對して申譯が無いではないか。其の人の身に取りて考え見よ。あの暗き中を日こそ短かき日で有るが、其の業を見る者聞く者一名とて賞する者は無い。今後は益々軍務に勉勵致し、長上の命令を服従し、かゝる罪人を出さぬ様に注意に、を加へなくては成らぬ。

社會が理想通り行くものなれば、世は至つて平穩無事なるべけれど、事實は然らずして理想の半ばを遂行する能はざるなり。

第一期間の回想

怒濤狂瀾

制裁

第一期間の回想

例へは空に一片の雲もなく、そよこの風も立たぬ滑かなる事鏡の如き春の海原に、希望に充てる前途を夢想しつゝ、出帆せし船も、やがて黒雲暗愴、天怒り、風吼える怒濤狂瀾の夕に逢ふとは、神ならぬ身の夢更ら知る由もなき如く、人も又一片の過失なき能はず。然り其の過失せし一切那に起る感情の善悪に依て、實に恐る可き事實を醸すに至るものにして、最も注意を要す可きものなり。

而して人は感情の動物なれば、其の感情を刺激する善悪に依り多大の光榮ある身にもし、亦甚だしき零落の人ともなせしむるものなり。

則ち圓滿なりし吾が中隊が長崎と横濱氏に起りし事件の如き、若し横濱氏が長崎に問はれし時、淡泊に善感を以て向ひしならば、兩人の感情一致して頼母しき事實を生せしならんに、横濱氏の悪より出てし爲め、遂に嚴罰に處せられしは則ち自ら求めし罪に外ならずして、終生取り去る可らざる身とはなりぬ。此れ正當なる制裁なる可し。

炊事當番の所感

然して人に善感を與へ、誠より出づる情は、實に大なる勢力を有するものなれば、苟も人と有る可きものは、誠の大道を光りある所に用ひて、他日の光榮ある身とならん事を勉む可し。噫誠の感情なる哉。

○炊事當番の所感

午前二時睡眼を忍びて、炊事場に至る。初めての事なれば場内の様子一向分らず、締役の命に従ひて何かと勤め終りぬ。大隊四五百名の炊爨僅々二時間許にして終るの仕掛、實に感ずる計なり。さて在郷兵等の話によれば、炊事場にては些細なる過失にても、妄りに毆打を受け、實に慘酷なる所の如き感ありしが、實場に臨み見れば案外仕業も容易く、且懇切なる古參兵の指圖により、何の苦もなく否寧ろ楽しく事を終りて、上番者へ申送りしは午後七時なり。炊事場に限らず班内と云へ、練兵といへ、恰も親睦なる一家庭の如き此軍隊、斯くの如くにして始めてよく同心協力一致團結國家保護の大任を全ふすべきなり

一斑

炊事當番の所感

以前の如き古參者は飽まで暴行を擅にし新參下級を愛撫訓育する等の事なき時に比すれば誠に無二の娯樂場といふも不可なからん。當事者が一意専心隊内の和親に留意せらるゝも偏に一致協同の素養に外ならざるなり。百事皆かゝる旨意に基き成立せる軍隊に我等は樂しく誠實に庶務を勉勵し、益軍隊の目的を達するに努力せざるべからず。此即我等として國家に盡す一事なるべし。唯所感の一斑を記して答となすのみ。

六月三日午後七時三十分炊事場に至り上番の炊事服務者の初年兵より一通りの物品を送られたり。右終りて釜七個に水を入れぬ、薪を取り入れ明朝の準備を爲し終り九時頃隊に歸る。六月四日午前二時起床して炊事場に至り、直に米洗を行ふ。右終れば直に飯を炊ぎ初めたり。一釜の飯は約十五分間計りにて炊ぎ得。同時

閑暇
感す。

に汁をも煮る。現在は釜数は七個使用して居る。飯及び汁の水加減も略覺るたり。炊事勤務は割合に多忙なれ共も、一般に於て怠慢で有る。米は一釜に八升麥は四升の割合なり。汁は一釜に味噌を小さき汁桶に一個宛入れる。菜の調理は未だ少しも知りません。炊事當番卒にも一通りの食器を給與せられたく思います

我等初年兵として第一先に炊事當番に服務し聊か感じたることを述べん。この勤務は予想せしよりはるかに安樂にして、恐るべきこと厭ふべきこと毫もなし、我れ聞く炊事勤務は最も殘酷にして、或は責め或は打つの所以まゝあると。然れども全然これに對して古兵の新兵に對する行爲は頗る寛大なるものにして、知らざるところは教へ導き、間暇あれば快談以て勞を慰むる等全く人の言に反す。只々飯釜擔ひ、水汲の少しく苦しき感づるのみにて、其の他の仕事は極めて樂にして、

炊事當番の所感

(正誤)

前途ぜんと これから
過去くわきよ これまで

漸やうやく

観念くわんねん

第三期の所感
思ひもよらざる程なり。

○第三期の所感

嗚呼前途を顧れば、今を去る六ヶ月前は十二月の一日で、肌も冷ゆる冬氣であつた。此處で始めて軍服を著し、營庭に出で上官の號令又は命令をもよく辨へず。唯班の古兵さんの御世話を蒙り、一より十迄で事を行つた、然るに一日毎に日を送るに従ひ、教官其他の上官より御懇篤なる教育を受け、其の爲めに我等もやうやく軍隊の情況等も知るに至つた。始めて喇叭の號音にて起居致せし時は何んもなく一種異様の感念を抱いた。而し段々慣るゝに従ひ、日々の練兵等も實に愉快を覚え、喇叭の音も知らるゝ如くなりたる時は、誠に悦れしかりき。かくなし居る間に、樂しき第一期間も卒業するに至り、先づ首尾能く一期も卒業した。其の翌日よりは是れ迄で新兵と呼ばれしも今日は初年兵とは變りぬ。此時は悦しいやら又悲しいやらわからの感じをなし

拔群びやくぐん

たり。少尉殿よりは皆は一人前の軍人となりたれば是れよりは充分奮勵せざるべからずとの御言葉を承りし時は、自心にいたく感じた。時は四月にて草木も目をさまし、中にも櫻の如きは萬草木に拔群して愛すべき美色と賞すべき好香とを散し、萬物を引寄せんとして居る實に愉快な時節なりき。然れども軍人は此處ぞと氣を引きしめ、汗水を流して行つた爲め、五月の始には第二期も良成績を以て卒業した。今は第三期をはなりぬ。此處に於て我々修業兵も思わるゝ第一期終るや、直に修業兵となり特別なる教育を受け各初年兵の模範なるべき重大なる任務を有する身分なり。されば此の事は一時も忘るゝべからず又先にて思ふやう修業兵の當初は朝間稽古夜は學科といふが如く、寸時の暇たになく其上仕慣れぬ仕事のみなれば、充分思ふ如く出來ざる故是れより後は如何にして皆と同様に爲し得るかと心配せしも、今日に至りしは何の考へも無く樂しく務め行く事は出來に至りぬ。而し此處に

第三期の所感

第三期間の所感

必要なるは克己力なりと深く悟つた。扱て是れ迄では各別の悲悦はな
く、濟みたれど、今日に至りて話にも話されぬ事情を起した。此の事
は充分胸に浸み込んだ。此の後は夢にも二度起さざると堅く決心した。
是れ自分のみか各人にも過ちなきやう總て協同一致といふ事に心を留
めて行ふと感んじた。尙新兵時代の事を掲ぐれば入營當時は無知なる
爲めか、凡ての動作甚眞目なりしが、漸く新兵の名を失ふと共に、ご
うやら氣をゆるみはせんかと思はるゝ事も見らるゝ事あり。實に異感
である。されば此處に於て梅や櫻と目を付けらるゝは修業兵なり。依
つて立派に我本分を盡すと盡さざるとは各人の心一つなれば、我は充
分振つてやる決心だ。思ふに最早は練兵の如きも僅に各個教練なりし
が、第二第三期となり中隊大隊と益々大なる物となりぬ。是れに連れ
我等の任務も重大なる位置に立ち至りぬ。今や最も重き風紀衛兵等に
服務する至り又種々の謹務に服すに至り愈々重大なる任務を負ふ事と

遺憾

勤務

夢中
旅次行軍

なりぬ。
依つて益々奮勵して軍務に従事する心は第一と感じぬ。
然る昨今は一般に對し大に氣のゆるみし如き行度々なるが如く見ゆ
る故に、以後は若し悪き事等をなしたる場合には、班一同にて充分忠
告し、尙改心せざる時は上官に報告するとか、又は班全部と絶交する
とかの處置は善きと感じたり。

○行軍後の所感

思い出せば過ぎし十八日早朝富士裾野を出發し、箱根山を越し國府津
に向ひ行軍せり。困難なる乙女峠を越せし時は、霧深く立ち込め遠望
を得不得。身の苦さに無中に過ぎしが、暫らく休息せば氣晴々として心
地よく、隨時行軍の途中山腹を過ぎ上を見れば青々と茂れる間岩石突
出し、山下を見下し眺れば、急峻なる谷深く谷間を流るゝ水は、大石
に激し、白泡を飛ばし、水煙立昇り、水聲高く響き、水流恰も白布を

行軍後の所感

炎熱

行軍後の所感
 亂せる如く、青き谷間に水白し。又所々の小谷には水湧き出で、岩石に傳ひ落つる様を眺め。余りの風景に氣を取られ乙女峠を越せし疲も打忘れ、暫時の間は愉快の内を通りしが、又もや疲を誘ふ汗は玉をなし、全身に湧出で照輝く炎熱と共に、我身に攻め來りしも、厭なく歩めば、最早十二時、晝食の命令に、心地よく急ぎ晝食終れば、又もや忘るゝ身の疲れ。思い出すは箱根の風景夢の如くなりき。暫らく休息し力を込めて出發し清き流れに浴ふて疲れし足を運べは、早くも著す甲府津村。此處ぞ吾等の宿營地なり。眠れば又も忘るゝ身の疲れ是ぞ誠の極樂なりけり。實に人の一生も是如く苦あれば樂ありて、苦は樂の種、艱難は人を鍛ふる槌なりと云ふ古言も一日の内に顯はれたり。

○
 待ちに／＼たる富士行軍も六月三日を初日として、都合往復にて二十

濡る。

迎ふ。云へば。

一日の行軍で有つた。途中三泊を以て富士に著したので有る。中の二泊は露營にて有つた。爲に一睡も致さず。其の上行軍と來て居る故、多少の苦も覺えたので有るが、然し、見込みの地點に向つて出發致す事故、左程とも思はず富士に著したので有る。時は富士山は笑うが如く我を向て來てたが、嗚呼天は二年三回の富士行軍を何と思つたらう。行軍の先などの天氣と云えば實に晴天で有つたに、裾野に著してよりと云うものは、毎日の降雨で庭に於ては思う様に練兵も出來ず。たゞ雨の小止み又は晴間を見ては練兵を致したので有る。後は廠舎に有つて少しの學科や各個教練などを致しては、日を送つたので有る。降雨の際、食器洗に行く人の姿を地方人に見せたら面白かつたで有る。青い顔に寒い風をして外被一枚又は外套一枚で、十人十五名と一組に成り、上等兵の引卒されて行く時などは自分ながらも見事なもので有つた。歸つて來ると其の外套などは全部火に當て、乾すので、又

行軍後の所感

草鞋わらじ

隠るかく。陰かげ

行軍後の所感

ラスのは安けれ共も、乾すのわ苦勞なもので其の外ぐわいたふ套かぶが乾いたかと思
うと、又もヌレルと云う風で、實に日を遊んで居る様でも、なかく
苦勞な日を送つたので有る。其上、樂みにくんで居た甲斐もなく草
靴まで造り上げ、登山は幾日であろうと友と話し合つたのも無きと云
う日、下士よりの命令を聞いた時こそは物事が手に付かなかつた。之
れも止むを得ぬ場合雨の爲めなれば唯を恨むと云う事も出来ず、裾野
に在りて晴れた日富士の雲間より見え蔭れる、又室の一合目二合目
を見えるを樂しむと致して居た。然るに天は我を助くる心も少しは在
つたで有ろう。第三期の檢閲を受ける日となる、雨も降らず晴れた
と云うても無く吾々の身を取つては好日和で有つた。檢閲は無事に受
け、七月八日の四時を以つて途中三泊にて歸營と云う事に成つた。雨
の少し降る中を廠舎をふり返りては見又霞に巻かれて居る富士山を眺
めては歸營の途に付いたので有る。其の日少女峠を越える時の苦勞は

到著たうちやく。建物たてもの

落伍らくご

實に、甚だしくしかつた此の日山は霞四方を卷廻し雨は少し宛顔に降
り掛た事故、落伍者と云う様な者も左程無かつたが、此日翌日の様な
天氣で有つたら、我中隊にも落伍者が多かつたで有ろうが、幸ひ其の
日は雨天の爲めに峯に上つて休んだ時は左程苦勞でも無かつた。然る
に九日より天氣と云うものは今迄の氣候は、どこえやら空には雲の一
點も無く、晴々輝々と吾々の顔を雨天の日の變り迄と云う程、照り付
けたので有る。扱其の日よりは水筒の水は益々飲み、天氣こそは晴天
で有るが、身体は昨日と同じく乾きたる所の無き程汗にて流れて居る。
早や晝食を致しても、よいと話しつゝ來たところが、箱根なる温泉場
の宮の下村に著出した所が、山中にも大變な健物が有つて驚いてし
まつた。

其の村に來ると左向止れの聲が聞こえた。扱ては晝食かと喜びつゝ背
囊を下したが、食事と云う聲は致さなかつた。皆青い顔致して、顔

行軍後の所感

行軍後の所感

には汗の川を致して、土の上石の上の區別なく休んで居ると、背より一枚と云つて出す人が有る。振向いて見ると、少し宛と云うて、出して下されたのは「かたばん」。嗚呼此菓子こそは少しでは有つたが其の志しを思ふと何んだか有難みを感じたので有る。またもや行軍と成つた、道の下を通つて居る河を見ると、其の景の良かった事は筆にも口にも云はれぬ。腹の方が良かったなら一層の景色が自分の身に浮んだで有ろう。太陽は我々を射殺す如く輝り付けて居る。一家の國府津にて舍營の翌日、馬入村南端にて戦闘を開いた後は藤澤川崎にて舍營を致したので有る。舍營に付く時の心持と云うものは今日の苦勞はごこえやら家にでも歸つた様な心持が致したので有る。馬入村の戦闘は吾々が歸途行軍中の唯一の活動で、又其の數等であつた。かくて七月十一日一同無事に歸營を致した。太陽はなかくに頭上を射て歡迎をした。

落く。

○前哨勤務の所感

朝から曇つた空はどんよりとして薄墨でもどかした様、唯西の方に眞墨な雲が散て居る。一日雲に隠れて居つた太陽は、何時の間にか西の山に落ちた。追撃する敵に我第三大隊は退却、我中隊は後衛となり今や下観間村に到着した時、斥候の報告によれば敵は今夜長津田村に宿營する模様なりと。それで我大隊も此地に露營する事になつた。時は恰も午後六時、我第一小隊は大隊の左翼小哨となり、此地を去る北方約二千米の公所村と云ふ村に向つた。長き行軍の疲れも厭はず、中尉殿の指揮の基に、勇然として所名の地點に達した。先嚴重に歩哨線の警戒と同時に斥候を以て敵情を搜索せしめた。余は森斥候の部下となり公所村より二千米横濱掛道より小川村附近に向い前進し今や小川村に達せし時は二三發の銃聲を耳にした。不圖見ると、こは意外にも敵の斥候五六名小川村を出で我に向つて前進するのであつた。余は斥候長

前哨勤務の所感

指揮の下、
所命警戒

蕭・

義俠
傳令

前哨勤務の所感

の命により報告の爲引返せば敵は早くも前に出でたる伊藤斥候と衝突を起した。同時に余に向つて盛んに射撃を加へた。余は必死となりて辛くも此難を避け、我第二下士哨に達し之を報告すれば、直ちに我援兵を送り遂に敵を撃退せり。之等は先此日は猛烈なる實戰的演習であつた。余は直ちに小哨に歸つて見ると、或農家の庭を借りて休んで居る。其所へ附近の土民が集まつて「兵隊様は今夜こゝい露營ですかまあ充分疲れたでしよー」と皆異口同音に同情をよせ。むしろを持ってくる。態々茶を沸かして持つてくる等何暮となく世話をしてくる。實に此附近の住民の儀挾心に富んで居るには感じた。一ヶ小隊の中七分は歩哨に配布されて小哨に残つて居るのは僅か六七名、其他巡察電令等にて忙がしい。七時頃となれば定めなき空は忽ち變じて小雨となり、余の歩哨の交代の頃は可なり降り出した。農家の内庭を借り今夜は何とか露を凌ぐ事が出来たが、未だ食事前の事とて空腹耐え難く、皆食

副食

眠い。

事の來るのを待兼ねた。處ひ大隊より不食として堅ばん九枚宛渡された。此時位嬉しかつた事はない。漸くして食事も終り中隊長よりは假眠を許された所が、忽ち熟睡して今度起きるときは頭の二つ三はやられても平氣だ。此夜は又別段眠く感じた。夫が爲我戰友大森川畑等は歩哨線にあり熟睡した爲、其事中隊長に報ずる處となり思はぬ大罪を受けた。之等は實に遺憾とするのである。間もなく夜はほのぼのと明渡る頃、大隊よりの命により住慣れし公所村を後に退却する事になつたので、急行軍を以て大塚村に達した。此所にて朝食し大隊と合し泰野町に向つて前進す。天未だ晴れやらねど清風面を拂ひ、右に富士を望み勇々として歩に移した。

○夜襲後の所感

月は光々として下界を輝して富士はおぼろに見ゆる夜三更、不時呼集の一聲あわれ故郷の空をたどりつゝある殘夢破られて、ねむい目をこ

夜襲後の所感

(正 誤)

仕度 幽か。

夜襲後の所感

すりながら螢の尻の様なランプの明かりで、水筒雑囊背囊など、アツテ、此れが我れのである、イヤそふじやない、自分の靴を此に置たのが何處に行たのか、まさか足がはへて歩いて行たではあるまいに、戦友の靴があるに何ふしたかと思へば、氣が増々むす／＼する。「整列、集れ」の號令は手に取る如くに聞ゆる様々互にしたくが出来て、幕舎を飛び出る。かすかに見ゆる人影、恰も障子に寫りし影の如く、前方の林は夜の神でも住て居るかの様に、深々として木の葉も枝も一つも揺がぬ。アー彼の林越しに見える方の昨日も演習を行た邊に行くのであらふかナー……………

なご、思わす知らず幕舎を見た。自分等の居る幕舎はあれが晝に見たより多く見える。青き草むらの中に風がよく併んで居る如何にも戦地に於て、イヤ「遼陽の一里ばかり前で幕營をやつた時の様であつた」とでも云ひたい様であつた。來てから早や四日にもなるが中隊に幕舎は

線 衝突。

氣を著け。 慌て。驅る。 終る。

何つあるか數へて見た事がたつた一度もない。一寸二つ三つ……………數へ經らぬ内に「氣を附け」演習呼集に付て話す。と嚴しい中隊長殿の號令に、あわて、空想にかられつ、ありし我れは初めて列中の者と化した心地。吁々こんな事を考へて居る時ではない？呼集の注意經りて愈々戦地に向て出發して、少し高き坂道を上りつ、第七中隊の幕舎を右に見つ、高地に至れば、富士から出て來る谷の水は滾々と聞ゆる、炊事場の火も見ゆるし、此の前の夜に演習をやつた満重山も見ゆる。そして凹地高地を上つたり下つたりして、愈々戦地に至れば第一、二中隊は先頭三、四中隊は二戰と大隊長殿の號令に戦闘は開始せられんとする。其内に斥候は出る……………

銃聲一發ア敵と衝突したな…………… 止れオリシキ前へ止れオリシキが幾度となくくり返されつ、敵に向て前進する。だん／＼近づく敵は少しも見えぬが敵は發見したのか銃聲がポツ／＼する。三百米ばかり

夜襲後の所感

夜襲後の所感

近いた時は夜はだんだん明るんで、敵が散兵壕によつて居るのがはつきり見える。折柄起る突貫の喇叭と共にワット一聲、敵は堅固に守り居た所もあわれ我が軍の勢にや恐れけん、退却したれば此期に乗じて占領したら演習中止のラツバの音。夜來の富士は隅なく雲につままれて見へぬまもなく、すると雲の切れ間から頂きが見えた。少し裾の方まで一寸でも宜いから見ればよいにと思はずつま立ちした。する内に何處やらで「今夜中の演習で我軍を射撃したのは斥候を射撃したのでなくてまばらにある松の木を目標に射撃したのであつた」と話を聞えた。夜の中に止めオリシキをやつたのは何處の邊であつたか自分も斥候に出て見たかつた。そして敵の影の方へ廻つて一撃の本に敵を敗北せしめたら何ふであるふか、なご考へつゝ幕舎に到着して、演習解散朝食をやりながら不時呼集の話。古人はよく云われた「倒れぬ先の杖の用心」今日も雨が降るか否や。演習整列は何時か。酒保は何

一撃の下に。

解散。

背囊。

眠る。 覺えた。

ふであらふ……………。

○廠舎生活の所感

別に文章らしきものも出来ないから日誌の中から引き出した様にでも書いて見よ、時は明治四十一年六月三十日第三期検閲の爲め一つは演習の爲め、習志野原へ出發した。行軍途中は夜にて屯營出發は午後八時半であつて、重き背囊を負ふて出掛けたが、長き途中も見もの一歩一歩に異りて苦痛も思ふ程にはあるまいと思ふたが、何分夜行軍の上に、眞の暗夜で東京市中は電氣の爲めに晝間の様であつたが、兩國より先きは眞暗にて背囊は重く、寂むくはなり漸次苦痛を覺へたが、元氣は此の時だと思つた處、眠くもなく人が眠つて行々列外に出るを見思はず笑ひを出し、後には列外にあるものを分隊長と名づけ笑ひながら、行軍する内、背も苦痛を覺へずなり、唯面白く行軍する内、眞夜中となるに従ひ、分隊長は益々多くなつて非常に面白かつた。習志野廠舎生活の所感

(正) 憾す。

(誤)

憾む。 講評。

弛む。 影響。

初年兵。

廠舎生活の所感

に著いたは七時頃にて、實に廣い野原で、一望千里青疊を併べたるの憾じがした。又今より十日間は此廣き原で、好天氣の下に活動するかと思ふた時實に愉快であつた。それより日々練兵し若は先輩の話の千分の一も憾せざりし、而して満足に第三期も良好なる公評を以て終へた。先づ十日間の起居し動作に就て少し計り書いて見よ。練兵や動作は屯營に居るより樂ではあつたが。一日も早く屯營に歸りたかつた。其理由は出張中にづると云はれる様の事が有つては大失敗だ。且又出張中は氣もゆるみがちである故、此出張は我等の身上に一大影況を及ぼし、且又最も他人の注目する所であると思ふと、失敗のない内に一日も早く歸りたかつた。而しながら歸つてか氣がゆるんだと云はれては、尙一層恥辱だと思ふと、實に寸時も氣は許るせず、實に進退身の置き處に苦んだ。又一つ吾が學た事がある。外でもないが他の中隊の始年兵の生活の有様に就ては、毎夜蚊帳の中で學んだが、

整へ。

一層

音の聞へぬは一夜もなかりき。中には(なつたぞ)とひやかして居る者も多かりしが、自我が中隊と比較して其の如何なるかに注意すると、實に氣の毒であつた。之に引き續ひて起るは常に自分が思つて居り且又兄より注意を受けて居る明年はと云ふ事を思ひ出し、此黒鬼の様な自分も涙を流して同情をよせた事も度々であつた。又或る時は中隊を見よと云ふ様に他の中隊の模範となつて居るが此の名譽を維持するは否尙一會高くするは吾等の責任である。今よりよく注意すべき事である。且自分の思ふ明年と云責任は一層重大となつた事に氣ついた出張中は右の様な思ひのみであつたが、事無なくして歸營したのは、愉快であつた。屯營に著たは十一日の午前三時半であつた。

○炎熱行軍

我が聯隊の第三大隊は午前三時を期し、敵軍を攻撃せんとし二時半の整列にて隊伍を整ひ、肅々として關本村に向ひて進軍せり時は明治四

炎熱行軍

(正 誤)

曇雲

銷沈

瞰下

昇る。 擧ぐ。 生ず。 千斷れ。

炎熱行軍

十一年六月二十五日なりき。東天將に白まんとするとき拂曉戦は始まれり。打ち出す小銃の音喧しく、呐喊の聲も勇しや。戦闘一時互り打ち方止めの喇叭は吹奏されぬ。時に全く夜は明け一點の曇なく晴れ渡り涼風膚を掠むる心地言語に絶せり。稍々ありて特務曹長殿の號令の下に路上に整列し……村に向ひて進行し、こゝに二時間の休憩をなし朝食を喫しぬ。愈々これよりは古より聞え高き足柄の嶮を越ゆるなり。兵は確固たる武裝を整へ、午前八時勇を鼓して出發しぬ。坂路は一步は一步より急に、或は晝猶暗き森林あり、或は紅緑點々たる美花あり、日は曇りたれども暑氣烈しく汗は歩に隨ひて玉をなす。意氣全く消沈して自ら頭の下るを知らず。

會々淙々たる溪水に會ひ、渴を醫し漸くにして山腹に達し、先發隊の絶頂を過ぐるを見るに、恰も蟻の列をなして進行するが如し。これを見て小隊中には大いに落膽し、坂道の難を唱ふるもの多かりしが、漸

くにして山頂に達するや、元氣百倍し、己知り顔に第一大隊の登り來るを見つめ、己が成功を誇るものもあるも面白や。絶頂に立ちて不瞰すれば、諸山は脚下に集り、我等に來り禮するに似たり。胸宇壯大、天に擧りたる心地す。古豊臣秀吉の高き屋に登りてさへ我が子の失ひたるを忘れ、朝鮮征伐の大事を企てたるを聞く。今我等雲間にありて如何なる感を生づるや。皆尻打ち下し、山路の難を語ひける程に雲はちげれくして晴れゆく様、山靈もありげなり。待ちにくたる富士山は我等の來るを迎ふるにや、萬古の雪を戴き嚴然と雲間に表れ出でぬ。此の時皆、掌を拍ちて喜びぬ。これ實に畫中の富士に異ならず。嗚呼心荒き武士が此の絶景に對して快と叫び、箱根の山水を賞美すは如何ぞや。これ日本人の日本武士たる所以なり。

古、源義家の落花に對し、一首の歌を詠じたるが如き、或は上杉輝虎の槩を横へて詩を賦したるが如き、古來武將にして風流を嗜めるも

炎熱行軍

隊伍

炎熱行軍
の少からず。されば我等軍人は益々風流の心を養ふと共に、古の武將に倣ひて、武を練り、武あり涙ある軍人たらんことを望む。この行軍に付き得たる利益は多かる中に、忍耐の修養體力の養成は其の最も大なるところなり。

○
時は六月二十二日我聯隊は天下の秀峰芙蓉山麓の曠野に向て、實戰演習の爲、行軍の途に上りぬ。先づ午前三時の未明に床跳起き、食事軍装忙しく支度を整ひ同五時營庭に整列して部伍堂々營門を出立ちぬ。此日天候曇涼、清風肌を拭ふて我等の勞苦を慰むること一方ならず。斯くの如き良天三日翌日は愈有數の險阻なる箱根の長路を踏越ゆべき日となりぬ。既に三日間數貫の装具を纏ひ、加ふるに兩夜は前哨勤務に明したれば、皆顔色衰へたり。午前三時半敵陣を突破して行くこと一里許、自炊の糧食を出して之を食す。食し終れば皆取る物も取

あへず臥伏する許なり。休息すること約一時間是より愈山路を辿らざるべからず。歩に従ひて足の爪先次第に上り、且一天忽快晴となり更に前日の涼味なし。途に第三大隊の休息するに遇ふ。越し行きて更に行進する中、程なく待ちに待ちたる停止の一號令、皆忙しく装具を解き、肌寛げ腰打掛けて休憩す。日光は益烈しく照り渡り、山間の細路微風だも渡らず、流汗注ぐが如し。水を欲するも得る所なく路は愈々急峻となり、身の勞苦いはん方なし。遙に前方高處に前進部隊の休憩するを望みつゝ、一步々々と攀ち登る中、次第に絶頂近くなり來れど、而も熱度は益高く、氣ばかり行きて足は出でず、皆大息して殆ど倒れん計なり。此時中隊長殿より水筒補充を許されければ、勇を鼓して水を求めんとすれば、滴る程の水に過ぎず。辛ふじて水筒に滿せしは赤き泥水。兎角して漸く頂上に達す。流汗衣を濡して、恰も水中に浸せしが如し。斯る所へ肌を掠めて吹來る清風裸體を拂ひ、思も

炎熱行軍

炎熱行軍

掛けぬ富岳は冠を脱して我等を迎へぬ。衆皆拍手して壯と呼び快と叫ぶ。險路登攀の勞苦是に至りて一掃せられ、勇氣百倍して元氣一新す。携へたる泥水の美味なること佳酒珍肴も決して之に及ぶなし。眞の愉快は勞苦の後に非れば到底得べからざるものなり。既にして富岳は又雲に蔽はれ、同時に號令一聲下山の途に就く、麓に至る頃大隊に合し午後五時半目指し來りし廠舎に著するを得たり。然るに翌々日より思はざる雨天と變じ、容易く止むべき氣色も見えず。聯隊千數百名の人員空しく舍内に臥食すること通じて一週日。豫定の實施演習も完了し得ざる憂あるより、即愈雨中の演習をなすの止むを得ざるに至りぬ。應用戰鬪射撃次を逐ふて雨中に於て行はれ、一行毎に著衣悉く濡ひ乾しては又濡す。かくして辛くも豫定演習を終りし程なれば、豫てよりの宿望たりし富士登山もなす能はず。遺憾ながら山を見捨て、歸營しぬ。先には必死の勞苦を積みし後無限の快味を覺え退て考ふるに

後には連日を徒費せしため、兼ての望も果す能はず。思はざる不本意を招く人の世に處る皆是の如し。萬難を排し困苦を忍ぶ人は常に偉功を樹て、譽を後世に貽すを得。放蕩を好み遊惰怠慢に日を送るの徒は皆貧賤微々人に驅使せられ、陋巷に住んで空しく哀れなる一生を終るに至るなり。我舊臘碌々たる身を以て名譽ある聯隊に身を投じ爾來二百餘日殊には修業兵の光榮を荷ひつゝ今日に至り、己の不注意よりして過失を招くこと前後二回。遂に無上の名譽を水泡に歸せしめ、君には不忠、上官には不義、親には不孝、戰友知己に對しても誠に面白の向くべき方もなし、進退茲に谷りて處置の取るべきなし事をなすも手につかず、心神煩悶して案の出る所を知らず。如何して此後を過すべき。唯恩免を蒙り、從來の如く教諭を垂れらるれば所望之に外ならず。敢て懇請すべきの價値はなけれど、前途の處方案するに餘あり。一辭を添へて御處斷を仰ぐのみ萬感胸を鎖して言窮す。

炎熱行軍

(正) 温顔

(誤)

滔々、愛づ、怒り、猛勇、忽ち

酷熱

水に就ての所感

○水に就ての所感

最愛なる水よ。汝こそ余が無二の親友なり。汝の温須何者か之れに及ばん。汝の性質何者か之れに過ぎん、止むれば止り、流せば流るゝ。如何なる器に入れても其形の儘になり、如何なる事を成さるゝも、決して頓著せず。其徳實又余は深く愛する處なり。又山間の瀑よりどうと落ちる其姿、又めではやさるものなかるべき。然るに水よ。汝は一旦いかりを發せば、山を崩し、橋を破り、土手をも破り、田畑を流失し、家屋を流し、人畜を害す等、其勢其綱勇又感せざるはなし。思返せば富士行軍上より照す熱酷はたちまつ上る寒暖計百度以上になりければ、人馬もなごかたまるべき。倒るゝ者は數知れず。我も倒れんばかりにて、一步も進む事ならず。折しも側なる谷間より清く流るゝ汝をば、思はずぐつと一口に入れば、生れ返りし心地にて今は又も熱下り行軍しかゝる事さへ數十回に及べり。嗚呼神なるか汝は

腰元

頼もしき、末期

僅に

我が腰本を離れず。よくも附き添ふたる行軍中、汝の爲め斯かる烈しき炎熱をも、何の苦しみとも思はず。行軍も無事に歸りしは之皆汝の爲めなるぞ。水よ。汝程世にたのもしき友はなし。實に汝を最後の水と云ふも又理ある事なり。水よ。又余は一命終らんとせし時。又來りて余を極樂浄土に導き給へ。

○新兵掛豫習の所感

回顧すれば去年霜枯の頃、きつき釦をはづして催に徒手體操を行ひつゝ居りしも何つしか第一期二期検閲も濟み進んで戦闘射撃も何なく了して茲に名譽射撃前とわなりぬ折柄余等僥倖にも新兵係りを命せられ今茲に豫習教育を開初するの榮を見たるは是れ實に御懇篤なる上官と兄たる古兵諸君の御指導に依るに外ならず今後豫習を受けし我は來年度に於て一層奮勵して君國の爲め軍紀の技脈となつて上官の御趣意を新兵に寫さねばならん即ち鏡となるの使用有るを感せり。

新兵掛豫習の所感

戰闘射撃

○戰闘射撃

七月三日。今日は午前中隊戰闘射撃。午後は第三期檢閲の豫定なり。過日來降り續く五月雨は尙止む可き風情もなく、間斷なき雨足を送つて居る。

駈歩 午後 恰も 小隊

午前七時二十分整列にて、中隊戰闘射撃を施行する爲め、東宮塚に前進したが、雨篠々として降り、殊に濃霧の爲め取り止めとなり、馳け足を以て歸途につく。やがて突撃に移り、其れより分隊毎に合せて、廠舎を一廻馳け足をなし、分列式等を行つて、午前の演習終り。午後は二時二十分整列にて、中隊戰闘射撃。雨を侵して東宮塚に至り時機の至るを待つ事約二時間。其の間無情なる雨は降りしきり、微風を加へて、全身冷も濡れ鼠の如く、稍冷氣を覺ゆ、やがて戰機熟せんとするや、中隊長殿は、嚴格なる音調もて、抜劍して、第二中隊は戰闘準備の爲め、東宮塚の高地に陣地を占領する。第一第三少隊散兵、第二少

利用有利 實驗

痛快

延伸増加

基準散開 陣地掩體

戰闘射撃

隊は援隊、第一少隊の一番規準。散れ。にて散解。東宮塚の高地に陣地占領。各個の掩隊を工作しつゝありしに、早くも敵は宮塚の高地に現れしかば、斯くも見たる中隊長殿は目標宮塚の高地に現れたる敵の散兵、九百、千、各個に射て。茲に中隊戰闘射撃の火花は散り初めた。第二少隊は右翼に延伸増加をなし、前面に現れたる敵の散兵九百、千にて射撃開始、やがて八百と替ふ。銃聲風雨と相和して耳を聳し、裾野の山野を震動せし計りなり。實戰の場合もさこそ忍んで、雨中の戰闘。吁々何たる痛快ぞやと、一人叫ばざるを得なかつた。其れより隊伍肅々、雨中を活歩して歸營せしは六時頃なりき。而して日夕點呼の折、少尉殿より本日の戰闘射撃は成績良好であつた。夫れは地物の理由せし結果で、其の少なる地物が如何に有用なる事の出来る事は、實檢せし事に依て知らるゝ事を得るであらう。然

減す。

第三期中の所感

しながら彈著に至りては、稍左に傾いた。故に今後は必ず自分の正面の敵を射撃して、敵全部に彈丸を集注せしむる様注意を要する。實際或る一部に彈丸が注がなければ、其の兵は沈著して射撃効力を充分現す事が出来、多大の損害を蒙る事がある故、慎む可き事である、尙戦時は平常命中彈の八分の一、喊する事の事なれば、實戦の場合に於ても、充分沈著して、己れの平常修得したる技能を發揮する様この注意ありたり。

斯くの如く何時たりとも沈著して修得したる技能を發揮せざる可らざるなり。

○第三期中の所感

顧みれば四十年十二月一日、親しき父母の膝下を別る不幸に遭遇した。固より公私の區別は知るもの、感情に脆き余は入營後も唯た何となく父母の事のみ心に掛り、一時は兵營を涙の谷とまで觀する迄の心の苦

撈らす。
原因、翻る。

しみを受た事も有たが、慣るにつれて迷ひの雲もいつしか晴れて、四十五年の六月今日になつた。早や梅や櫻は散りて、今日此頃は若き緑の滴らんばかり、窓の硝子が何となく氣に障る様になつた。之れからは次第に日が永くなり、蚊や蠅が飛出して、自然に人の心も懶げになつて来た。隙さへあれば晝寝がしたくなるも天下の公道である。夏になれば、兎角練兵が撈らす。怠慢勝ちにて時節は満期除隊の切迫で、畢竟軍隊生活が面白からざるに原因す。輝て考ふに地に回顧の風景無く、春來れども花は咲かず、秋來れども紅葉せず、此山は兀として、水は黄み、鳥唄はず、蝶舞はず、此れ等の地に住むべからざるか。否住めば都會は煉瓦と石にて築たる兵營にて、水火風震懼るに足らず。六尺の机に腰掛もあり、鐵製の寢臺に電氣燦爛たり。是吾の住家錦堂瑤臺に勝ること。余も一書に耽りて、太郎が机に向し手書の如き思ふ内に、一聲鳴り亘る點呼喇叭の本に、人員検査を受け、消燈の喇叭に

第三期中の所感

我身も寢で極樂を夢むるや否や、戦友の呼び起に、服装を正し、目をこすり、余の悪しき不寝番にて明朝起すべき紙に手簿と木銃を申受く。時は一時草木も眠る真夜中に、自分は木銃を提げて、其勤務中である。僅に一時間短い……然し此の間に於て幾多の感想はぞくぞくとして、吾腦中に起るのである。あゝ人間一代の境遇の變化は堪へ難い。昨年は日光山の下に耕農者。今は腰に劍を帯び銃取る我が身。來る波は何であらうか。斯く吾半生を過しぬ。四十二年の十二月一日始めて社會の波を受けて、其境遇の變化に由て何となく物珍らしく、種々の空想を横へた。然し一年後今日今夜、この兵營のこの床の上に、獨り木銃を提げて立つとは、夢にだも思はなかつたのである。恐らく他の友も同じであらう。高き聲は各班に聞ゆる。手を出す者。足を出すもの。之を正すのがやくめである。吾勤務一日の疲れ、此の睡眠に由て恢復するのである。あゝ上を問はず下を問はず、貧富

役目

續々

仄かに、

雖

の差別なく、皆國家の干城として、血税を捧げて貳年の久しきを、この兵營に送る友千鳥。同じ渚に浮ぶ身の、各自の行末や之も何何。今や起番の一時間は拾五分を餘すのみ。一巡して歸れば時計の二時を打つた。時遠く灰に聞く寺の鐘は兵營の寂寞を破りてゐる。淋しさを感た。余も空想に、を重ね右に我身練兵の間には體操に、劍術に學科に教習せらる。然し諺に云ふ吉野山のを初つせも花がさかねば唯の山。ひじりと呼れし昔の人も、學ねは唯の人と、知れども光陰矢の如し云へ供も雑談や、夜間演習や、猛烈なる散開教練の事に力を分ち、操典教範を繕いて、親しき日も數拾日なりぬ。然し余は希望達せざるも國家干城として大なる名譽を荷ふ。年中に、草を枕として露に打たれ、雨に梳られ、炎熱焼くが如き野外演習や、寒威肌を裂くが如き日も、長途行軍其他の營内の諸勤務等、幾多の困苦缺乏と戦はねばならぬであつた。吾等は今後益々奮勵して是すべての艱苦に打ち勝ち、是

恐怖

二年間の回顧

非とも二ヶ年の任務を貫徹せねばならぬ。工手希望の覺悟とは、讀者之を解し笑はん事を希望すと云々。

○二年間の回顧

回顧すれば去る四十年拾貳月壹日は、余の初めて軍人となり此の聯隊此の中隊の家庭に入つた紀念日である。吾々は初めて軍隊に入るに當り、一種の恐怖の念を持つて居つた。實際地方に有つては軍隊と云へば一種異様の感に打たれて居る所が、入隊して見れば誠に其の赴を異にして居るのは豫想外で有つた。入營當時は長き此の貳ヶ年を如何して送る可きかと、時々煩悶した事等も有つた。軍隊の起居に馴れるに従ひ、新兵係の教官や、助教助手の懇特なる教訓の本に、忽ち時を過し、嚴冬に戸山原頭の各個散兵や、代々木練兵場の雪の中の前哨勤務や盛夏の富士行軍も、意にも止めず、終始苦樂を共にして來た。噫月日の小車は早や巡りくして、在營貳ヶ年に茲餘す所數日と成り、除隊

懐しく。

感慨

入營

の日も追々間近かく成つて來た。入隊以來貳ヶ年間何の致す所も無くして、無殘夢は過したのを耻ぢる。茲數日の後には兄弟よりも懐かしく貳ヶ年間苦樂を共にした戰友諸子や、恩愛深き上官と、惜しき別れを告げねばならぬ。父母と戴く上官や、兄弟と頼む戰友諸子と別れた後は、誰に指導を乞ふべきか、誰に訓戒を受くべきか。噫吾等の前途は尙遼遠なり。然れば此の時に於てか、日頃軍隊に於て養成したは耐忍力と、誠心一筋に到して後止むの決心と、又一つには新兵當時の心を以て、事に従はば必ず成功し得るならん。懐かしき兵營を後にして、親しき戰友諸子や、懐かしき上官と別れるに當り實に感慨無量なり。

茲に汗臭ひ日記帳の中から二三書き抜いて在營の思ひ出としよ。信濃の片田舎から徴兵に召されて、井戸の蛙が大海にでも出る様の心

二年間の回顧

英雄。體。故郷。惜し。

二年間の回顧

地にて、郷里を出て来た。數多の群衆に送られて貳年間無事に勤めて歸れど、其の行を壯にせられた。英勇の心緒と迄は行かないが、實の所言へは活潑の停を装ふて居たが、實際心中は古郷が名残惜しかつた。一聲の流笛と共に見馴れし山川を後にして、上京し、夕刻無事著京した。先づ指定の宿舎にと著いた。明朝は早いからと云ふので、其の晩は少し早く床に就いたが、何だか明日の入營が心配に成つて、中々眠れない。眼が冴えて種々の空想にのみ走る計りだ。他の友は如何と思えば、矢張り眠れない様子で有つた。翌朝未明より、支度を整えて、午前七時頃營門の前まで来た。風紀衛兵の嚴格なる態度に、一つ云ふに云われぬ感を生じた。嚴めしい營門を潜つて、營庭に集合した。暫らくの後各中隊に分配され、今まで兄弟同様の親友も何れの中隊へか行つて終つた。

酒保

溶す。

入隊後約一ヶ月計り経つた頃、或は日曜日に、營庭で親き友と出會したから、二人で酒保を訪問した。非常の雑踏の中から、漸やく少しの堅麵麩を得て、或は机の一部え陣取つた所え、第十一中隊の某上等兵殿が來られて、互に過去將來を語り合ひ、楽しく半日を送つた。是れが新兵當時の一番樂しかつたことだ。噫酒保は實に兵隊の俱樂部だと思ふ。野外演習から歸つた晩等は、入浴より先づ第一著に酒保を攻撃した。日曜日に堅麵麩や焼芋を嚙つて、彼の公園を大に香氣を發揚したことも度々有つた。立派の八の字の志願兵でも、立ち乍ら堅麵麩を嚙つて平然として居る。是れ等は軍隊一種獨特の樂みだと思ふ。

富士行軍

懐かしい西の空、三階の窓から朝夕となく眺むれば、嚴然として雄姿を東海の面に輝かして居るは彼の富士の高嶺を見る度毎に思ひ出す、一雫の雨だになく炎天交々として、風は死し、草は臥し、赤銅も容かさ

二年間の回顧

容赦

草鞋

(正)

誤

二年間の回顧

ん程で有る。

時は明治四十一年六月の末方、名も恐しい様な富士行軍を行われた。炎熱は容赦無く吾等を苦しめ、晝の暑さに、夜は露營と来て、随分體力も衰へて来た所え、足柄峠に差し掛つた。急の坂道を炎熱と戦ひ乍ら遂に海拔数千尺の絶嶺に達する事を得た。忽ち一陣の涼風は彼方より枯れなんとする吾等に恵んで呉れた。此の時の心地は今でも中々忘れられぬ。夕陽西山に沈む頃、漸く瀑が原の廠舎に著いた。

野營中は今度は雨に苦しめられた。戦闘射撃し雨の中で行われた。苦心して作つたわらじも無に成つてしまつた。七月八日住み馴れたばらつくを出發して、乙女峠を越えて箱根の絶影を眺め乍ら、下つて國府津に一泊した。朧月夜に浪の音も枕に響いて、一夜を明かした。翌日も炎熱益々強く、殊に程ヶ谷を通り越す時等は、路上は乾燥し切つて、樹木は砂塵で、眞白く成り煙の様な土烟が、顔にとかく〜と浴せ

意氣揚々

撫でる。

かゝる。此の時こそ全くまいつた。正に落伍する所で有つたが、中尉殿にメントール酒を戴いて、漸くの事隊に附て来た。程ヶ谷は全く悪い所だ。

秋季演習の殘留

健全なる精神は健全なる身體に宿る。噫身體の弱き程不幸なるはなし。況して軍隊に有つては殊に然りだ。入營以來寒暑苦樂を供にした戦友等は秋季演習を口々に稱えて、威氣陽々として武装検査をも終つた。余は健康診断の結果、殘留と定まつた。嗚呼何たる事ぞ。殘留とは唯さい小さい此の體も、一會肩身が狭まく成つた。一日風紀衛兵に服務した。宵暗で寒風颯々と吹き来て、時々顔をなでる様で。空には北極星や數多の星が霜氷る計りの色して互に光を競つて居る。丁度十二時から一時までの立番で、草木も眠る眞夜中で、營内は唯シーンとして音なく、時に外套の袖に霜滴るを覺ゆるのみ。噫今頃秋季演習に

二年間の回顧

(正) 假眠

誤

日記の一節

出張して、銃を枕にせる我が友の露營の夢や如何ならん。時に砂を
 軋つて来る靴音、歩哨交代して營舎に歸れば假眠の上番だ。赤毛布一
 枚に五寸角の枕の吾等に、寢室のすき間から吹き通ふ夜風の物音に呼
 び起される心地して、一入寒さを感じた。漸くにして秋季演習も終つ
 て、諸君は静々堂々として營より操り込んで來られた時等は、全く肩
 身が狭まかつた。其後折り々として同年兵同志が秋季演習の苦戰談や、滯
 在してもてた話等をする度毎に思ひ出して、殘念で溜らない。然し幸
 ひに今年健康で各演習に殘らず參加し得たるは誠に嬉しかつた。然
 し茲五六日で諸子と別れを告げねばならぬと思えば、返すくも名殘
 惜しくて溜らない。御別に臨んで予等中隊一同の健康と幸福を祈ります

○日記の一節

四月四日。この頃の日朝點呼は舍前で行はれる。綻びかけた薄紅の
 櫻の下で、柔い蓆の上に、點呼が濟むと豫行演習を遣る。春、春、長閑

古兵の心得

な朝の光を浴びながら、引鐵をのどかに曳く時の心地は妙なものだと思ふ。今日は基本射撃の第五習會だ。引卒官が少尉殿で三十六回の頭
 一右と左とには驚いた。黄い旗の夢は譯も無く破られて了つた。總點
 十七點……氣持の悪いこと夥しい。昨日の祭日の汁粉が崇つたもの
 と締める。

四月五日。野外演習だ。遞傳といふ事を知つて居る者があるか。はい。
 誰だ渡邊か宜し言つて見ろ。テイデンと謂ふのは電車の停まる事であ
 ります。つい僕が吹出して。皆が動揺めいて、流石の中隊長殿も破顔
 一笑。どうも渡邊には驚かざるを得ぬ。

四月六日。中隊長殿の精神訓話があつた。國民の中の華と成らねばな
 らぬと染々思つた。兵營生活、楽しくて値あるものである。

○古兵の心得

我等古兵新兵に對しては大に才識あり、經驗ある先輩者也、然れば我

古兵の心得

等新兵に對しては、有力なる先輩者たるの義務を自覺し、以て能く親切なる又熱心なる誘導啓發者として、新兵を導かんとする。然り而して我等と新兵との關係は雷に之れのみならず、此れ以外に又別種の關係ありて存するなり。何ぞや他なし、兄弟の關係あることは是なり。中隊は正に親睦なる一家族也。古兵は盡く新兵の兄なり。吾人は互に兄弟の如く弟の如し、兄弟の義は、正に天下の精秀なり。兄弟相和せざれば一家衰へ、兄弟序なくんば、一家紊る。兄弟の親、兄弟の義、豈に夫れ忽にすべからざるものなり。

されば我々は能く兄は兄たるの情誼を體し、能く彼等新兵の相談相手となり、保護者となり、十分に彼等に慰安と便利とを與へ、彼等をして毫も逡巡し、畏縮することなく、天真のまゝに純良に悠長に、十分に發育をなさしむることを力む。故に彼等に接するには飽くまで溫和にして親切に、飽くまで篤實にして、情愛を有し、持することは

厳正に、彼等を撫する事は、寧ろ寛大に失すべし。武士道の半面は情熱燃ゆるが如き人道なり。情なき勇は竟に匹夫の勇のみ。徳なき勇は竟に小人の勇のみ。武士道に生活する者此處再四思はざるべからず。抑々彼等新兵の新に入り軍隊生活に就くや、起居の動作衣食住、物品の名稱等に至るまで、西も東も全く別世界の感あり。而して要領は之れを解せず。呼吸は之れを知らず。唯茫たり漠たるは勿論、頗る窮屈孤寂、異臭且つ困難の感に打たれ、忽ち憂鬱に陥らざるは、立所に畏縮し了り、之れが爲めに教育の進歩を阻害し、能力の發展を抑止すること夫れ幾許なるかは、我等新兵時代に嘗め得て、既に十分の經驗ある所なり。されば初めより之れを透道し、漸次營内の起居になれしめ、遂に兵營生活は一舉一動各規準する所ありて、苟も放肆偷安を許さず些少の怠慢過失も必ず上官の矯正と督責とを免れざる事を悟らしめ以て自然に其の品性を謹嚴方正ならしむ。さて此の文句中にある督責

古兵の心得

(正)

誤

古兵の心得

とは、仁を以て正し、責むるを謂ふなり。徳を以て自ら反省せしむるやうに仕向くるを謂ふなり。而して教育の呼吸は、夢寐にも機微の間にあるものなることを忘れず。飽くまで彼等に向て精神的慰安と補助とを與ふるに注意周到ならざるべからず。要は唯それ彼の崇大なる天命を奉じて、後進者に對する先輩者たるの自覺と同情と、又義ある弟に對する「可愛い」の眞情とを片時も胸裡より放逸せしめざるにあるのみ。

○
新兵の入營は今や目前に控へたり。之迄骨となりたる上等兵殿古兵殿は除隊される、新たなる上等兵古兵が今よりは骨となる任務を有せり。扱其の指導法を如何にせば果して良好果を得るや。依る所見習所更になし。唯先輩諸氏に見習の一途あるのみ。吾等入營以來何一つ教へられぬ物とてはなく、如何にして教へられたか。過去を顧れば皆感涙

一徹

に忍びざるなり。三つ子の子供ならば未だしもなれど、貳拾才を越へたる子供へ一つ一つ教へると云ふ人の心配を如何であつたらうか。吾等の如き一てつものに於て特に然り。諺にも子を以て知る親の恩とやら、持たぬ吾も今は其の大神の萬分の一を覺るを得たり。斯くの如き親切なる指導に依りて導かれつゝありし時代をよく考へて、新兵を教育したら決して間違なからん。吾等新兵時代は先輩諸氏の新兵時代と如何なる點に於て異なるかは、入營以來學びし所ならん。然らば此上は尙一層注意に注意して新兵に樂をさせるは、吾等當然の義務である。新兵第一期間は雑巾を手にもせず、第貳期以後は修業兵と云われて班の事は致さず、又人より手を借りられた事は幾度なるか。上等兵古兵なるものが手を借りる事が一度でもあるかと思ふ。如何なる場合に於ても決して手を借りるべからず。知らざるは之を教へ過は之をあらためさせるが古參者、上等兵等の責任である手を借

古兵の心得

古兵の心得

りなくては腦に入らぬと云ふ人は二十世紀の今日には一人とてもあるまい否過ちあれば自分で之を後悔する位である又手を借らず共他に手段あらん又吾等が手を借りられた時は何と感じたか時には面白くなかつた事もある又時には手を借りた爲めに其の情に引かされて感涙に忍びずして精神は青雲の如く後に至りて大に愉快に感じた事もある然れ共之等は全く感情山に登り思はず手を出したるものにて始めより手を出したるものにあらずと信ず吾は手を借ると云ふ事は決してせぬ人の子である手は出さぬと云ふが主義である遠き故郷の兄も此の事は數回教へ諭した事である又内務班の日常の仕事に就ては如何にすべきか之協同一致の必要を感じる所なり上等兵 即ち新古兵掛上等兵の協同は此の點にあり班に上等兵の協同なく常に互に横目を使つて居つたら其投足は何所に行くか唯だ苦をするは新兵である其れでは吾等の本分でない明治三十一年と云ふ年を一年犠牲となれば後年皆然り然らば古兵

へいしんていごう
平身低頭
けんしき
見識

かへつ
却て
くわんねん
觀念

一年犠牲となるには上等兵は如何に手段を取るか余平心低頭を以て古兵にあたるの外なし何事をなすにも權識を振るべからず人間が頭を下れば何事も出来るものと信ず吾等新兵時代に夜遅く野外より歸へりて炊事へ飲食洗に行つた時は如何であつたか又古兵掛の上等が此の時に新兵は今歸へつて來た計りだ古兵行つてやれと云はれた時には如何に感じたか此の之恩に對しても新兵を使う事は決して出來ぬであろし、然しながら一つ注意を要する事ある斯の如くして新兵をして歸へつて新兵は樂をするものであると云ふ感念は決して起させてはならぬ之は新兵掛 上等兵の責任なり即ち古新兵掛協同するは是等の點も又必要である之を要するに何事をなすにも新兵時代の事を思ひ出して成るべく便宜を與へ元氣よく熱心軍務に勉勵さす様に内務班の上等兵(新古兵掛)は協同して互に心を思ひやり新兵をして悪感情を抱かしめざる様に指導する事が最も必要と感ずる

古兵の心得

名譽

階級

班

下士候補者たりし所感

○ 下士候補者たりし所感

我輩は下士志願であるから。眞面目で學術科を勉勵したならば、何時
しかは伍長に成れるであらうと思ふ。然るに、諸君何の爲に下士志願
をするか。利慾の爲か、或は名譽を求めん爲か。或は兵卒を困めん爲
か。否、左様ではあるまい。十中の九迄は、國家の爲に盡さんとする
忠君愛國の氣象より起つたのに外ならないのである。

故に其の目的と云ふたら、誠に高尚なものであるから、幸にして我等
未來に於て伍長に任官することが出来たならば、此の上もない光榮と
するところであると思ふ。一方階級から云へば、伍長は下士では最下
級であるが、然し中隊の重要な幹部の中に入つて居ることは云ふ迄
もない。是れから考ひて見れば決して輕視することが出来ない。即ち
班附となつては、班の成績を善良ならしむる責任がある。其れである
からして、班内の成績否、中隊の成績上に關しては直接關係がある

疲る。
瘦す。

と思ふ。

されば、未來に伍長となるものは、其の責任の重大なることを念頭に
置き、品性の修養とか、或は身體の鍛練とか、或は學術の研究等は、
寸時も忘れてはならない。而して未來には理想に近い班附伍長となつ
て、班員をして、圓滿なる一家庭を作ること心掛けなければなるま
いと思ふ。

○ 一昔以前の軍隊

(老曹長)

十年前の夏日光に遊んだ途次、豫て入營すべき兵營を垣間見た。三層
の煉瓦造りの建物が如何にも恐ろしいところの様であつたが、その年
の十二月にはその何となく恐ろしかつた兵舎に起臥する様になつた。
寒かつた入營當時は九州男子が、この位の寒さにと疲せ我慢はしても
水道の水は冷たかつた。又油の取り方も其頃なごとはお話にならぬ位
烈しかつた。新兵掛の教官は非常に六ヶ敷い少尉殿だとも思ふた。各

一昔以前の軍隊

一昔以前の軍隊

個教練などでは不動の姿勢の事を非常にやかましく言つた。眼球など少しでも動かしたら大變だつた。突き飛ばされた上一時間位の不動の姿勢は安値の方だつた。術科の方面では斯くして僕等は新兵時代に軍人精神を養成された。

毎晩の様に學科もあつた。軍紀心だとか攻撃精神だとかに就ては、凡ての學科の七分位あつた。殊に軍人の一大義務である服従などの事に就てはやかましく注入された。

少尉殿の曰くお前達の先輩は青山原頭で速歩行進などで膝の延びないものは、區隊長にとられ教官にぶん擣られ中隊長に青竹でやられて教育を受けたものだ。斯うして教育を受けたお前達の先輩は日清戦役の大戦争に勇敢に弾の中に活動してあの大捷をやらかした。それに今のお前達の精神的状態を観察すると寒心に堪えないとは口癖の様だつた。

撲る。

唾ゆ。

教練や學科では斯くの如くで、内務班に歸ると古兵に氣兼ねるのが一通りや二通りではなかつた。箸のとり様から八ヶ間敷言はれた。寸暇を得て手紙書くのにも贅澤だ。煙草喫むさえ新兵の癖に生意氣だと苦言を聞かされた。

殊に三十年兵の大學校歸りが居つたので、人一倍の氣苦勞もした。嘘、斯く迄せねば軍隊は收まらんものかと、點呼後便所で泣き毛布をくわえて故山を夢見ることが一再ではなかつた。

新兵しくく、夜廁で泣く

曉に研く上官の靴

つまりぬ處だとは誰でも新兵同士口には言はねど顔色が皆そうであつた。

けれども僕は思つた。斯くの如く色々氣苦勞のみならず、肉體の制裁を受けても、皆お國の爲めになつておるのである。君のお爲めにな

一昔以前の軍隊

一昔以前の軍隊

つて居るのである。僕等が黙つて服従して居れば國は安全である。東洋の平和は吾等が維持して居るのであると同様である。然り平和を得んと欲せば戦備を怠るべからずだとか、眞に武力のない外交はどの方面にも失敗して居る。そうすると眞の武力とは武器そのものではなくて其の人に待つことだ甚だ多いのである。十人の木偶坊より一人の軍人精神で固まつた軍人を望むで居るのはほんとうである。現代の人情は非常に浮薄である様に思ふ。いざとなれば命の惜しい人の方が多いのである。此の浮薄に人間にこれを求むるのは甚だ難い事ではあるが教育方針の如何は非常に軍人の精神方面に影響するのである。かるが故に斯くの如く左様に新兵掛教官はあつたのだと今では感服して居る。

人身権だとか名譽權だとか色々やかましい世の中なので、軍隊の教育方針も理想的になつて來たが、これでは變事立派な兵隊さんは出來ない。いだらう。何故なれば現今の被教育者はまだ、教育方針を辱しめなだけでに智徳が發達して居ない。但しこれは全般を通じて、あつて一部のものにあてはまらない事は無論である。

現今の教育方針は要するに理想に近いものと思ふ。忌憚なく言へば暴力を加へなくても立派に動く今の兵は、いざ謙倉と言ふ場合にも眞の彈の音を聞いて立派に活動し得る兵隊であると信せられてゐる。

これもとより僕の僻見に過ぎない。又僻見たらしめたいは吾人の情だが、事實と近い事と多くの經驗は語るのだ。古兵のたちはからは毎年度斯く見られる申送りなんだが、これは争はれない事實である。一年と蠻行はなくなつて今は全く皆無である。由來軍隊生活が世人に誤解せられるのも一昔前の事實に過ぎない。

○ 夜間演習の所感

時は明治四拾三年七月六日、午後五時の整列にての夜間演習こそ演習

夜間演習の所感

夜間演習の所感

中最も興味深き大戦闘の一つなりき。時は丁度霖雨の時期、空は一面の暗雲にて何時雨とも定まらず。晴とも定まらず。富士の裾野。富士山頂より墳き出したる焦土を以て、自然地上を覆ひて尺餘に及び、随つて石の大なるものあるを見ず。凹凸定かならねど、高き富士山の方面に傾斜となりて廣漠たり。原は草生ひ時々小松を見刺一面に生ず。

大隊は幕營地を出發して新築中なるバラックの右方に集合して、時期の熟するを待つ。敵は(第七中隊假設敵たり)堡壘山(演習上の名)の向つて左方高地に前進哨を出して警戒し後方高地に在るもの、如し。時こそ來りて演習開始の命は下れり。潮の如き第五中隊を中央第六中隊左第八中隊右翼となりたる大隊は大波浪の海岸に打ち上ぐるが如き勢を以て、敵の前進哨に向つて突入せるに敵は早くも退却して、後方凹地を越して本陣地に逃げ上る所敵に後を見せる事なき日本武士も

進歩 駭々

照準 搜索 口糧

明瞭

敵味方となりて演習上の都合によりては止むを得ず背後より彈丸を送るの面白さ。若し實戦にして實彈ならばと下らぬ空想も心中に畫かれるのであつた。折しも黄昏時に加へて、細雨となりたれば、明瞭に敵方を見ること能はず。此所に對陣とはなりぬ。暮色暗々として迫り來り、最早標準も定まらず。此處に於てか一方には斥候を出して、敵情を探索し。少數の監視兵を残して警戒し、給養分携帶行糧直ちに食すべしと。

時間の経過と共に、暗鬼は刻々として迫り來り、雨は益々盛になり、僅の前も見ること能はず。前には斥候の衝突か、轟々たる銃聲の夜陰を破りて響き渡る中に、味方の防禦工事は開始せられ。前述の如き土質なれば、工事は最も易く駭々として進歩し忽ちの間に目的通りの膝射散兵壕か出來上がり、配備成りて、敵情如何に、敵に夜襲の企てあるか、若し敵にして此の勇ありて夜襲し來らば吾が腕前を顯はして敵

夜間演習の所感

講評

暗澹

夜間演習の所感
 の奴輩皆殺しいざや來れと待ち構へて居るのであつた。
 果せるかな。敵わ吾が陣地の左方に迂回して、第七中隊の前面に不意に出で、突き込み、縦横無盡に荒れ廻りたれば、味方の狼敗一方ならず。我が左翼の敗北。吾が斥候の大失敗となりて、戦闘は中止となる。高地に集合して、大隊長殿中佐殿及び少佐殿の構評あり。夜は益々更け雨は益々降るばかり、勇氣満々たる勇士も、雨の中暗き中に見る物も無く、聞く音も無き中に、突き立ちて盛んで煙草の火の見ゆる中は良かりしも、時経るにつれて一二アアと嘆息するもの有りしかば、熱心に構評中なりし中佐殿、大聲叱呼不届千萬な奴めと暗澹たる夜空を響きて、一時に眠氣を催して呆然たる輩を攪破して、今尙其聲の耳の底に残り居るのである、斯くて構評も止み、歸營とはなりぬ。暗中一寸の先も見能はず、唯前の兵の後に辿り、草の中やら藪の中やら、凹凸した土地を夢中三太郎。此の時ばかりは股を高く上げとも

練兵 誤る

○ 在營二年の夢

云はれずに亂暴に上る事は、聯兵場に於ける速歩行進よりも以上であると思はれた。途を誤りて引き返した事もあり、漸く幕舎に歸りたるは夜も既に遅かりき。
 嗚呼二年間といへば、長くにも思わるゝものゝ、過ぐれば其短かきに驚かざるを得ず。余が故山を後に、東都に出て來たりしは、今より二年前、即ち四十一年の霜降る頃であつた。朝未明に起き出で、集合場に来る頃、既に入營者群集し、中隊を定めらるゝを待つ程に、我名を呼ばれたるに、何時もなら平氣であるに、今日に限り、胸にぎつと應へた。何故なるか。余にもわからなひ。中隊が定まつたので、某上等兵の引卒の許に、兵隊屋敷に連れられて來た。果は之れが聯隊かなと仰げば、兵舎は巍然として、恰も泰山の如く意味ありげに見えられた。舎前には軍服帽子等の用意あり、五六の兵隊さんの世話で、今迄の和在營二年の夢

在營二年の夢

服は丸め込んで、早軍服姿となつた。之れで今日より兵隊の一人となつたのだ。此時一寸家の者に見せたかつた。さあ身装も一切調ふた。一番困つたわ、襯衣の釦の堅ひには殆ど閉口した。余一人のみでなかつたらしい。(新品が故に)。二階三階と昇り、左へ曲つて突き中りの所へ案内をされた。班内は横机に上等兵殿と古兵一人淋しかつた。挨拶もそこ〜に済せ、腰掛に腰下せしもの、物珍らしく彼所此行儀悪しく見廻した。驚いた。整頓棚から手箱寢臺迄、ちやんと姓名の記入してあつたのには膽を潰した。實に軍隊は敏捷で規則正しいと云ふ事がわかつた。二三日の内は殆ど夢中、上官の官姓名すら覺ゆるに苦しんだ事もあつた。今考へれば馬鹿氣て居る様であるが、當時は頭を悩ました。忘れもせぬ引卒で入浴の歸り、區隊長に汝の目は立派だの汝の目はお姫様の様に細い、軍人には不向だのと講評に嬉敷思つた時であつた。兎に角新兵第一期間は實に繁多なもので、日一日と加ふる

に随ひ、新らたなる事のみ覺ゆるのであるから、新兵としては殆ど餘裕なしと云ふても過言にあらず。初めの一週間は、起きるに付け、寢るに付け、古兵さんの世話にならざるなく、然も親切には感じた。恐らく誰も同感ならん。一期間は夢幼の如くに過した。三月の末検閲の終るや、僥倖にも修業兵に撰拔せられた。苟も模範兵と撰ばれし上は、其名に對しても、普通初年兵より以上の事なくてよからんやと、覺悟をしたのであつた。修業兵間は、實に複雑極まる時には炎天に晒らされ、鐵棒にぶら下り、牛屋の看板と笑われし事もあつた。又歸りの駈歩なごも、忘れられぬ。夜陰に乗して不時呼集のべるに、飯盒搜索に汗流し、事もあつた。月日は用捨なく過ぎ第三期の檢閲富士行軍の擧こそは、一生の話の種となる。機動演習も過ぎ、古兵諸氏と別れを惜み、淋しき生活もほんの四五日。余茲に新兵掛の末席を汚す事となつた。十二月一日よりは新兵對手實に愉快ではあるが、其責任の重きを

在營二年の夢

在營二年の夢

案じられた。四ヶ月間別に貢献する所なく終つたが、新兵の熱心なる努力と、教官區隊長の御指導で、一期の検閲も過ぎたので稍々安心とも云ふべし。安心も一寸の間修業兵掛の榮譽を忝ふする事になつた。余の光榮何に如かん、父母に便りすれば父母亦喜びたり。然し名目のみで、何の御役に立つ事なかりしは今更言ふまでもなした。之れも素養なき身なれば許されよ。除隊の期も日一日と通り機動演習も愉快の内を終へ。懐かしき战友、愛らしき弟と袂を別つ日となつた。噫之れもやんごとなき事なれば、未幾久敷文通するべく契りしなり。置土産の御注文紺屋のあさつてで遂々日が切迫して思ふ儘に記す能はず。筆に任せ、明日と云ふ今晚、然も清燈後下らぬ事をかき並べ、聊か余が感想を記す。

消燈

二星霜も早や夢と過ぎ、剩す處唯數日を過ぎずして故山の人とならぬ

繰る。

荒ぶ。

ばならぬ。

願みれば、吾々が入營して、著も馳れぬ軍服に、右向左向を操り返し

くしたのは、四十一年の吹く風寒き初冬の侯であつた。

勿論氣候は風吹あれすさぶ故山に比ぶれば長閑なるも、當時は住み馴れぬ軍隊生活、寢臺の中に慕敷故山の夢をたどつた事もある。

而し國民の最大義務。この「義務」といふ二字の爲に、精神を奮勵した事もある、こふ云ふと如何にも女々しいよであるが、而し吾々は

軍人を希望したのではない。義務を果すべく入營したのだ。義務たるの二字は堪へず念頭を去らなかつた。入營後幾久しくして修業兵に撰

拔せられ、少尉殿に懇篤なる教育を受け、幸にも上等兵に昇進した當時、上等兵としての覺悟及希望も少なくなかつた。

以來重き新兵掛。更に大任ある修業兵掛は、實に不肖の光榮である。然るに愈々其任に當れば、教練に、内務の實行に、自分の思ふ半分に

在營二年の夢

(正) 慚愧

(誤)

在營二年の夢

も及ばず。何等のなす處無く、上等兵として唯星を三つ付けたと云ふに過ぎず。而も勤務に對しては、唯慚愧に堪えぬと云ふより外はない。更に二年間を個人の上から考ふるに、勿論二年間有形的の效果は勿論、精神上又體育上無形の效果は少くないのは國民學校の賜物として、一生の紀念に大事にして持つて歸ります。

嗟呼沈痛悔恨如何なる因縁ぞや。

曾て聞く古歌に左の如く詠めるものあるを

明日ありと思ふ心の仇ざくら

夜半に嵐の吹かぬものは

と。小卒今回の失墜によりて、此歌の眞意に思及び、感激胸を裂き、夙夜斷腸の思に苦められ居候。思へば思ふほど、此歌に對して面目なく、實に何とも言葉の出づる所なし。此度の事のみならず、在隊二ヶ

年間に於ける數回の失行は悉く此歌の眞意を解せざりしの致す所に外ならず候。

今回の事の如き、若し以前に於て此眞意を解しなば、決して斯る事には至らざりしならんものを。然れども後悔何の益かあるべき。之を悔ゆとも到底取返しにつくべき由もなく、唯空しく己が心を惱ますのみとは、思へど亦少しも考へざる、否、悔悟せざる能はず。私の心中は一浮一沈殆ど定らざる有様なるを。茲に忝きは人の同情と懇論の一事にて、私にとりては實に以上の有りがたきものは無之候。退て考ふるに軍隊の教育法規ほど公明正大のものなく、只管敬服の外なし。此度の處罰を蒙りし如き、決して偶然にあらず。必ず何かの因あるべく、潔く罪に服すは少しも苦しからず候。

己に後悔の要なきを悟りたれば、再び此事は思ふまじ。又口にも出さざらん。之よりは元氣一番過去の事を度外にして、益奮勉し、誓て從

在營二年の夢

在營二年の夢

來の羞辱を雪がん決心を有す。今後私が身の上にて就ては宜しく御安意の程吳々も奉希候。

あ、在隊二ケ年の間に於て、危き失態をなすこと數回に及べるを、特別の恩情により辛くも事なく終らんごせしを、今に至て遂に斯の如きに至る。是天なり、命なり。又何をか憂ひ何をか恨み申すべき。次に貴官より在隊間の所感を認むべく命せられてより已に數句をすぎ此間決して暇なしといふことなし。然るに斯の間荏苒遂に今日に至る先の歌の意を解せざりしと、又私が克己心に乏しく精神至て幼稚柔弱なるを證するものにて、今更ながら悔悟せざる能はず候。二ケ年間の所感少からざれども失行の後今は胸塞りていふ能はず。多言に勝る感慨あるを御憫察願上候。

二ケ年前の今頃は、種々に煩悶してゐた。二ケ年の兵營生活が如何に

在營二年の夢

我が一生の進路に障礙を與ふるであらふか、こんな虚弱な身で良く軍務に服し得るであらふか等と、それからそれと未來の事まで想像して夜も眠り得ぬ事さなつた。入營後の心得等も、友人や在郷軍人が親切に教へて呉れたが、其當時は頭に入らなかつた。けれ共覺悟だけは充分してゐた。入營して見れば、日々の練兵も漸を追ふて、易より難に進んで來たから、苦しいと思つた事は數ふる程もなかつた。日常の起居も不規則に馴れた身には、初めは苦しかつたが、何日しか却て心地よく感じる様になつた。だから種々の事を考へてふさぎ込むよりは、日課に追はれて身にも心にも暇がない方が、愉快であつた。で日々の演習等も厭やと思つた事はなかつた。世間の者は、軍隊は身体には非常に骨が折れて苦しい、つらいが氣苦勞がなく呑氣だと考へ、又言ふてゐる。然し實際は反對だ。如何に

在營二年の夢

苦しい演習よりも、一言の小言の方がつらかった。一口の賞詞や慰勞の言葉で、一日の勞苦も愉快な思出の種となつた事がどんなにあるか知れない。又

日常の一舉一動は皆上官の目や耳に入り、すぐ精神上の價値を云々されるのであるから、少しも油断が出来ぬ、實際氣苦勞であつたが、然し精神修養上の効果は、どんな立派な學校へ入つて、どんなわらい先生の教訓を受けても實行しなければ何にもならぬ。軍隊は實行が確實だから價値がある。如何にするにせよ、精神上の欠點を擧げられていゝ心地であるものはない。初めは形式的だけでも眞面目にやるが、段々習慣になつて天性的になつて來るのは明かに認められる。だから軍隊は先づ有形な型の中へつめ込むで、其次に段々無形の精神を型の中へ入れるのだと思つた。で時にはつまらぬ事をさせらるゝと思ふた事もあつたが、之も精神修養の一方便と思ひ返して勵むた事もあつた。

詰む。

要するに、過去二ケ年の兵營生活の效果如何は、未來の問題で不明だが、又夫れ丈け望みがあつて楽しみにしてゐる。

○

イヤ君、ソ一知らぬ振りして居ちや、僕が困るんじやないか。芽目度歸休したからだつて、知らぬ振りしやいかんよ。

何年立つてもこんな顔付位は覺わて居て呉れ給ひ。

「ヤ濟まなかつた實は知らぬ振りしたわけでもなかつたマア感辨して呉れ給ひ」

「ソンナニ君に頭を下げさする程のガラな僕じやないが」

子君軍隊生活。思ひ出すよ。親しき友と袂を別て、郷里を去り、名譽なる軍隊生活。是れに當た時の僕は小踊りしたよ。そして愈々入隊。厚き中隊附諸官の誘導にて、西も東も知らぬ我々が一人前の兵隊さんになつたのは、昨年の四月下旬の新兵第一期檢閲で、そも此の第一期

在營二年の夢

勘辨

在營二年の夢

間の誠心こそ身邊を離さず、其幾分なりを永久繼續したならば、五ヶ條の本旨に反する事なく、自分が職業も天晴れ成功すべしだ。必ず忘れぬ様御同様心身に銘し、己が職分を活歩すべしだ子、君。それから君、百有七十名の内から撰抜されて。修業を命せられた。此修業時又氣憶せねばならぬ。何回となく少尉殿よりは、新兵時代を思ひ出せ、と訓示された事は、脳に僕は銘しである。困苦欠乏。此の四字僕は思ひ出す度に、思ひ出す修業時代の駈歩で、兵營迄で来て落伍した。其時に三人の班員に迄、御注意を受けた事が思ひ出る。出ると同時にゾットする感がある。僕はそれから『何の』と云ふ氣が出たつたよ。それから、それ、此れから此れと回顧すれば、續々として頭から流れ出る。此れを流し出すのが僕は何とも云ひぬ愈快さです。二年目の年はごふも新兵時代を忘れ勝ちだつた。爲めが欠點も多かつた子、僕は僕獨りて苦んだ家政問題。

愉快。

記憶。

癢。

トートー落ちつぶれの青二才。君、僕の身なりを見て呉れ給ひ。此の前後を一纏めにして書いたならば、よほど面白い小説じやネ。さあれ除隊の三四日前云われた訓示は忘れまい子。僕は忘れんよ。後々折があつたら僕も……………だ。

「イ君失敬だが僕は歸る」

「なせ……………僕の話がしやくにさわつたのかな」

そんな事じやない。僕も永く居ると、飯……………が……………!!!

そふか僕も實はそふじや。そんなら次にしよふ。左餘なら。

歸休後の戦友。さもありぬべしと思わると、在隊の實戰談。話し合ひ度きも、わそらく百分ノ一にも及ぶまいと、そのみ心痛に堪へん。僕等如き後備兵にはまして知らぬ振りの……………!?

己が榮耀を笠に上べの在郷軍人たらんとする者ないではないか、精神だけは軍人精神ならん事を望む。足らずの自分も實行せん決心だ。

在營二年の夢

新たに年を向へ、三百六十日で、なつかしい郷里へ歸れると、指折り數へ初めてから、三百もかけ、二百も終はり、余ます處、僅に二日で、馴れた屯營に名残を惜む様になつた。顧みれば、二年間長くもあり、短かくもあり、一昨年の今頃、震へながら、入營して、飯の食い方、喇叭の區別など教へられたのも、二年の昔。總ての事に若干の疑懼心を懷き、其の反面には、又少しの希望を持つては居たが、概して新兵一期間を名づけて畏縮の時代と云ふ。此の時代も漸く過ぎて、第二期に入つて、特別修業する様になつたが、何んもなくすゝまなかつたが中途から反抗的に、奮發して修業した。要するに四月以降、十一月末に至る迄の間を、多忙時代と云ふ。

次で古兵は去り、上等兵を命せられ、新兵は入營する。昨日迄の初年兵は一躍下級幹部。何ぞ責任の大なるや。何で變化の大なるやだ。最

迎ふ。

免かる。

床し。

初はなんどなく可笑しくもあり、又耻かしい様な氣がしたりしたが、段々眞面目になつた頃は、早や又新たな年を向へ、新兵も少しは生活に馴れた頃だ。こゝなるど人の否古兵の弱點として、少しでも樂をしたくなる。自分其の一人たるをまぬがれなかつたが、然し大に自ら戒めて、殊更に樂もしなかつた。兎角する内一期も過ぎ、昨年に比して一層ゆかしく見ゆる櫻は盛に我々を向へ、續いて隨時檢閲が来るので、大分多忙であつた。然し昨年の修業時代とところで、又此時こそ多忙の時は却つて閑の時より仕事が多く出来る。閑ある時は今日は遊んでも又明日と云ふて延引、遂に其時機を失すると云ふ始末。人間須らく多忙なるべしと云ふ感が屢々であつた。無事檢閲も濟み三期以降は平坦として、平地を行くか如く、之れと云ふ事もなく、唯々初年兵の若干軍隊生活の要領を會得し初めたのか目に付くのみ、然し其反面に於ては、又除隊後の計畫に少しく頭を余分に痛める様になつ

た。結局二年兵の四月頃に至る迄の間を、軍隊生活中の香氣時代と云ふ。五六月以降は除隊後に於ける計畫に伴ふ準備をしたといはふか、閑のある時は少しはやつて見た。別に命名する程の時代でもない。要するに二年間の兵營生活に於て自分の得た利益と、損失とを列擧すること

「樂は苦の種、苦は樂の種」と云ふ事。「忍耐は成功の元」であると云ふ事。「自分の現在の職務に忠實でなければ人は決して信用せらるゝ者でなく、又從て事を成す事が出来ない」と云ふ事。「命せられた事はいやでもやる」「長者に服従する事」。以上の五ヶ條は今更物珍らしい譯ではないが、兵營生活に於てよく發揮せらるゝと云ふか、兎に角自分は感を深くしたのだ。欠點を云ふと命せられなければ仕事をしない、つまり進んで事をするに云ふ氣が少くなつた。又命せられた仕事は要領よく早々終つて、多く遊びたいと云ふ氣が多くなる。大体に於て差引

利益の方が多い。嗚呼二年間の生活。有事の際彈雨の間に馳驅し劍霜毒霧の間を潜り、共に屍を異郷に晒す戦の友と、今や袂を分たんとす。嗚呼何ぞ哀別一掬の涙なからんや。

噫、その夜

噫、その夜

「宛で梅雨のやうで御座います子」

「鬱陶しくて困りますよ。御大葬には晴れて貰はぬと」

「眞實で御座いますねエ。折角の時に是では」

「わゝ、誠に然う——」

雨に洗はれた土のうへを、蛇の目と蝙蝠とが傾け合はせて談して行つた。

大高君も袴の裾を寒げながら、高い足駄に泥を踏いで歩いてゐた。

九月十二日、眞晝の光は曇り勝ちに重苦しく世を掩ふてゐた。傘を傾けては人を避けながら大高君は俯向いて麻布の北日ヶ窪町を大跨に急いだ。

女かみゆひ、と掲げられた看板を見ながら、低い軒下に立ちながら傘を畳むで、袂を拂いた大高君は、臍氣な古びた標札——岩崎つる——を見てゐたのが、傘の露を振つて了ふ

と、這入つて行つた。

「左様で御座いますか。はい、はい」

「明日、朝の七時頃までに來て頂きたいと申されました」

「はい、はい、新坂の御邸の方で御座いますね」

「然うです。甚だ御苦勞に存じますが、御頼みいたして來いと」

「はい、承知いたしました。何うも降ります所を御使ひで恐入りました。明日の七時に間違ひなく上りませうで御座います」

と中年の女の聲に交つて、際高い大高君の太い聲の、斯うした會話が、庇の滴の間に洩れ聞わてゐた。

第三高等女學校の鐘の音が街の上に傳はつて來た。

大高君は烏打帽を冠り直しながら出て來た。ちらと空を仰いで、傘を擴げると、溝を跨いですたゝいと歩き出した。

崩御の三日後から何枚か剝ぎ去られた表札の無い、木の門を砂利を踏むで、大高君は

噫、その夜

歸つて来た。秣の淡い臭のする厩のまへを、横に折れて勝手の方に歩いて来ると、お金の聲が障子の中で仕てゐた。

雨、雨、蕭條として音も仕ない、細い雨が心靜かに此の邸を降り圍むでゐた。

二

十三日は臨た——

古綿のやうな雲が浮いてゐた。人は空を仰いだ。

薄明るい光が差して来て、軒に滴が断つてゐた。

五時、

俥から降りた十五六に成る嬢が古稀の老婦人の手を曳いて、玄關の石段を上つてゐた。六本木通ひの電車は、青山へ、青山へ……充填し切つた人々を間断なく運むで来た

「まア 何て人だらう」

お金は朋輩と一寸玄關から覗いて見てゐたのが、何か慌て、這入つて行つた。

七時。

髮結のつる女が勝手の方に廻つて行つた。

軍装を仕た大尉が電車を乗りすて、佩劍を握り提げながら、拍車の響を立て、這入つて来た。一寸腕時計を見て、玄關の底を仰いで、靴拭を踏むでゐた。そして蹴るやうにして石段を登りさまに、スーツと扉を押して手輕に這入つて了つた。

新坂の御邸——

三

「唯今 奥様は御湯を御召し遊ばして被居いますから」

「はい、はい」つる女は金の髪を見ながら身体を屈めてゐた。

「何卒、今少し御待ち下さいますやうに」

「はい、はい」

暫く経つた。

傍の襖が静かに開かれて、中腰の夫人の小さな姿が現はれた。
つる女は座蒲團の傍で手を揃へた。

「さ、好くこそ。御待遠さまでした。」と夫人は笑まし氣に這入つて來られた。そして何か考へて、

「今日は、然う、二階で結つて貰ひませう」

「はい」

つる女は、夫人の後に隨つて階段を上つて行つた。

「今日は宮内省の方に伺ひますから、下げ髪にして下さい」夫人は鏡臺を運むで、座ると斯う云はれた。

「承知致しました」

白い服に袂を包み込みながらつる女は、キッチンと端然せられた夫人の頬の緊つた面ざしを鏡のうちに認めた。

髪は梳く手に餘るほど長かつた。澤々した手觸りに白髪の一條を見なかつた。

閣下は時々、隣の室で、悠やかに蓑を喫みながら、夫人の髪を見てゐられた。
出て來た曩の大尉が申上げてゐた。

「唯今、寫眞屋が参りました」

「うむッ、有難う。静ッ、寫眞屋が來たさうで、早うせ」

「はい、唯今——」夫人は答へられた。

閣下はすつと立つて出て行かれた。

つる女が丹精の「ね髪」は美しく垂れてゐた。

夫人は毎に無く、髪に氣を掛けられるのだつた。

「髪の形が壊れなければ好いけれど……」

「はい、お大丈夫とは存じますが」つる女は訝りながら恐縮した。

「いね 今日だね。宮内省から自動車が参るので、夫で参内して、還つて復た夕方から青山に——御見送り致さねば成りませむので、旁々髪の恰好が壊れずに居て呉れ、ば好いが」と、夫人は頻りに氣を懸けられるのだつた。そして静かに眸の奥で笑はれた。

種々の道具を収めて、つる女は仕事服を脱ぎかけてゐた。

「これから、寫眞を撮りますから、私は一寸著換へて。悠くり息ひで行つて下さいね。今日は餘程多忙しいのでせうに何うも難有う。」

つる女は暫く前髪を疊に著けてゐた。頭を上げると、夫人は靜かに會釋をして立上られた。

四

「先生、乾板は何を入れて置ませう」

「然うだね」と、先生は鏡に向ひながら、髻を剃つてゐた。白い頬に匂つてゐる長い髭を器用に捻り上げては、安全剃子の薄い刃を反して眺めてゐる先生の横顔を、安井君はレンズを繰で磨きながら視上げてゐた。天井の硝子板を透して落ちて来る鈍い光が、後景の灰色に浸み込むで、薄い色彩に圍まれた撮影室が、淡々しい重さを見せてゐた。

「君、四つ切りとキャピ子と持つて行かう」

「然うですか。」

「そろ／＼最う行かう。あゝいふ方だから時間は嚴しいに違ひない。」

「新坂まで何分位かゝるでせうねエ」

「三十分と見積つて、七時半には出て行かねば不可まい。では直ぐ準備して呉れ給へ。」

乾板は僕が入れるから」先生は石輪箱の蓋を仕た。

「然うですか。」

「君と大江君も行つて貰うかな」

「承知しました。」

安井君はレンズを持つて立上つた。

顯の蒼然とした奇麗な先生の長軀が一ツ木の街を眞直に歩いてゐた。静座法に鍛へた下腹を、縮めては膨らしながら力を入れて往く先生の踵の跡を、三脚を擔いだ安井君と革靴を提げた大江君とが隨いて行つた。

假東宮御所の前を新坂町に左に折れかゝると、稠密した群集は又更に街を埋めてゐた。

電柱に添ふて垂れた吊旗の下で、先生は時計を見た。

「二十分まへ」と、呟いて、先生は堂々と一師團司令部の前を過ぎて行つた、秋尾新六

と里梓の名刺を取出して、古い木の門を入つて行つた。

昨日の夕方に使を齎した、緒顔の山田大尉が門の傍の砂利のうへに佇んでゐた。

「や、昨日は。閣下は最う御待兼ねで」

「いや」と、先生は鄭重に胸を傾けた。

ふと光つたものが、玄關の右の西洋窓に映つた。

「寫眞師かツ。わーッ、待つてゐた」

植に附けたやうな白髭の上の、枯れた頬を先生は見た。高濶い圓い額の下に、雙つの

腫が、先生を瞰てゐられた。

「は」先生は愕いて向き直つた。

「うーむ、御苦勞に。今行く」むし〜と頤髯を撫でられる正装の腕章が廣い幅に光つてゐた。

そして懐中時計のうへに、二重險の深い皺が落ちて、薄灰いろの頭髪が禿げ上つた額を蓋ふてゐた。

「わーッ、玄關が良かる。山田君、失禮ぢや、表門を締めて呉れたまへ」

安井君と大江君とが愴惶と駆けて行つた。

「好いよ。君達は早く仕度し給へ」山田副官は黄ろい懸章の總を揺つて、扉を押してゐた。

先生は三脚を立て、は、光線を測つて、位置を直し始めた。

シャツターを二三度調べて、ピントを合はしてゐると、紅の綾が窓を掠めて消えた。玄關の扉が開いて、搖々と瘦身の將軍が現はれた。誰も彼も禮をした。

將軍の潤い唇が、もぐ〜と動いて、禮を復されながら、稍色の褪めた金モールに埋められてゐる正帽を、両手に持添えて冠られた。俯目の將軍は胸間に輝々する勳章の一つ〜を撫で、は位置を正された。織い柔かさうな純白の前立が揺れてゐた。

玄關の扉の前に、扁い臺石のうへに直立せられると、帽を脱つて、凝然と姿勢を整へ

られた。あらゆる色彩と光と、曇たる白髯と、古い面どが、崇い調和を顯した。

「うむ——今寫すのは、イギリスのコンノート殿下に献上するのちや。粗末に撮つては相濟まん。な」

「は」美しく分けた髪を先生は恭しく下げた。手迅く度を合して、乾板を挿した。

「唯今」先生は將軍を仰いでシャツターを握り締めた。硝と英姿を収めた幕を降した。

そして秋尾先生は謹むで挨拶した。安井君も大江君も真面目な顔をして辭儀をした。

「うむ」と首肯いて、將軍は一揖せられた。

「最一つ。待つて呉れ」

眞新しい光彩を胸から脱された。英國のであつた。後には皇國の光ばかりが輝いてゐた。左胸の金鵝が際立つて大きく残つた。

「之でお願いする」

將軍は帽を冠られた。

先生は鞠躬如として 斯の姿を收れた。

將軍は臺石の上を降りて、曇つた天を仰がれた。その揃はぬ髯が空を向いて、英雄回頭是神仙を秋尾先生は思出されずには居られなかつた。

静かに玄關の扉が開かれて 薄茶いろの夫人が両手を合して出て來られた。下げ髪が肅ましく垂れてゐるのが、長い會釋の間に想像された。

「私も何うか御ひとつ」

深く合はされた襟の雪白に、無地の薄茶の胸許たかく、同じいろの袴が結ばれてゐるのだつた。袷のいろは橡色であつた。

「足許の所は何卒撮りませぬやうに」

薄茶いろの上靴を穿いて居られるのだつた。

命を果すと、

「態々」と、將軍は秋尾先生を視て大きく首肯された。先生は、懐しさを覺れた。

「は」と首を垂れた。

將軍と夫人とは這入つて行かれた。

「旨く撮れましたかね」

山田副官が簾々と砂利を踏むで近づいて来た。

「如何でせう。御両方とも、御正装といふのは、非常に御珍しい。御記念といふ事でしたら一つ御室で御一緒に撮らせて頂けませぬでせうか。」先生は左の無名指で髪を掻いて言つた。山田副官は先生の澤々しい髪を見上げながら

「ふむ、然う。待へ給へ。伺つて来やう」這入つて行つた副官が直ぐ首を出した。濃い瞳をして、

「好からうと言ふ事だ。入つて来たまへ」

將軍は書齋の机の傍で蓑を喫つてゐられた。無造作に投げ出された「朝日」の紙袋が机のうへに新聞の横に斜めに成つてゐた。夫人は傍に立つてゐられた。前のまゝの姿であつた。

老婦人と少女とがその後手に手を曳きあはせて佇むでゐた。

「斯の座敷で撮れるのかな。わーッ」と、髪を洩れて煙が湧いて出た。

「は、充分に其用意を致してまゐりましたから」

「宜し、願はう」

秋尾先生は窓の邊と壁とを見まわして、机を少し靜に位置を換へた。椅子を寄せて、

「何卒 閣下は此方に」

將軍は、ふと夫人の後に廻つて行かれた。兩手を伸ばして帯の邊を直して、二三度軽く叩かれた。

共に頬に笑はれた。

老婦人も少女も疑と眺めてゐた。斯うした將軍の舉動は二人に最も珍しかつた。

「や」と、將軍は腰を卸された。

「奥様は御立ち遊ばして」

夫人は襟を直しながら小刻みに寄つて來られた。薄化粧が仄かに伺はれるのだつた。

「安井君、薬を、いつも位に」と先生が言つた。

將軍は新聞を眺められた。

夫人は其の右後に起つてゐられた。

「少し音が致しますから、御免を蒙ります」秋尾先生は安井君から受取つた金屬器を高く上げた。

マグネシウムの烈しい光が瞬いて音と共に止むだ。

「宜しく御座ります」

「むッ、難有う」

圓味に著しく發達してゐる將軍の前額を秋尾先生は竊かに暫く瞞めてゐた。

五

二重橋から、伏見宮邸に、將軍と夫人との同乗の自動車は滑かに軌つて行つた。

行人は皆眼を敬てた。

十時を過ぎて、歸つて來た自動車は再び新坂の邸に横に停まつた。

正午

簡素な品々が一つ食卓のうへに並べられてゐた。

將軍と夫人とは向ひ合つて箸を上げられた。

「何と仕ても 桃山までは是非とも御供仕りたい——思ふて居たのぢやが、今日 實は宮中で、方々が私の面色といふものが餘程悪いやうに言はれる。大切にせと言ふて呉れるので、折角で有るはするが、思ひ止まることに仕た。ね、夫程、顔色が勝れぬかね」と、將軍は箸を擱いて、兩頬をかさかさと撫でられた。

理められぬ髪と、剃子を忘れられた髯とは 惘々乎として曇つてゐた。哀へが秋の氣に著しかつた。

そして、蕎麥の少量だけがその義齒に噛まれた。さらぬだに墜ちた頬の肉が、所々に伸びた生毛に連れて、もくくと動いてゐた。

箸を収めると、將軍は一揖して起つて行かれた。一つ食卓の横に座つてゐた老婦人と少女とは、瘦身鶴の如き後影を見送つた。

夕餉が来た——

夕餉の卓が設けられた。

將軍は蒸返したパンを割つては、喫せられた。

同じやうに、夫人もパンを食べてゐられた。

「パンを上りませむか。一つ何うです」と、將軍は老婦人を顧みられた。

「パンより日本食の方が頂きよく御座いますから……」

「然う。今日はなかく御遠慮なさいませぬ」と、將軍は微笑せられた。

珍しい日では有る。老婦人——夫人の長姉——には健に思はれるのだつた。こ

の一日の御機嫌の好さ。——静子も然う。——將軍の戯れ言——珍しい事ではあつた。

六時が打つた——

馬丁の大谷君も、書生の大高君も、車夫も、御大葬に御訣れすべく命せられて、唯々

と出て行つて了つてゐた。

老婦人と、その孫女とが残つてゐた。

お金はお朋輩と、臺所の雑用に紛れては、こどくど働いてゐた。

最う参内の時限を、將軍も、夫人も、二階から降りて見なかつた。二階は靜かに物

の音も聞けないのだつた。

七時が打つた——

チク　タク　チク　タク　時計は毎のやうに、常務を忘れなかつた。

少女は幾度か時計を仰いでゐた。

五分　十分　十五分　三十分……

靈輦が御發引の時は近いて来た。

四十分……何故か少女はわな／＼と慄へた。

二階を靜かな衣擦が仕て、叔母様——夫人が靜かに降りて來られた。

につと頬笑まれた叔母様は、棚のうへの葡萄酒の瓶を取上げて、栓を抜かれた。その

まゝ捧げて、階段に其の一足が掛かると、一寸振回へて

噫その夜

「……………お前様の邸にも行きたかつたのですが、つい忙しくてね」と、復た片頬に心持ち笑はれた。

そのまゝ静かな電音が上つて消えて行つた。

少女は復た時計を見上げた。

五十分……………五十五分……………四分……………三分……………

デーツと時計が音を起てた。

夜氣を貫いて、宮城の方向に、誰人が引鐵を曳いたのであらう。

砲の第一音が、うら悼しい響に、人々の耳朵に籠つた。

第二音——第三音——

「？」老婦人は唯ならず片膝を起てて、天井の方を烈しく瞞めた。

第四音——第五音—— 鐘の音が空に翹けた

偉きな星が墜ちて行つた……………

御輦車は御發引を了らせた。

ふかし芋

真直な、坦かな、灰いろの路を、参又した銃の尖を揺りながら、四列の縦隊が長く動いて行く。

その後尾から、六頭ばかりの牽馬が、機關銃の銃身やら其の托架やらを背負ふて歩いて行つた。ひらひらと埃が湧く。

遠い雲の隙から、差してゐた日の光が、間も無く消えて了つた。晩秋の曇つた朝は行軍日和であつた。

降らねば好いが。何處まで行くのだらう？——誰も彼も然う思つてゐた。

前方の遠くに、弾くやうな小銃の響が二三發聞えた。

傳騎が濃い埃を浴びて驅けて行つた。

F少尉は中隊の後尾に著いて小さな兵卒の背囊を見ながら特務曹長と話し合はせて、歩いてゐた。

縦隊は狭い低い、黒い村落に這入つて行つた。
 喧しい夥しい梭の響に連れて、女の歌ひあはせる乾いた聲が聞えて来た。
 銃聲が大分烈しく成つて来た。

F少尉の中隊は、大隊と共に、その村の空地畑に開進した。

半白粗髻の旅團長が、旅團司令部の人員を供に、栗毛の馬を駆けさせて行つた。

小隊の前に立つて、Fは背囊を擦り上げながら、傍らの小さな青桐の幹に手を掛けて休むでゐた。

空地の右側は浅い水田になつてゐた。その前面に密な松林が横に長く續いてゐた。

肥つた背の低い大隊副官が馬上に還つて来た。

そして、大隊は復た街道に出た。暫くすると駆歩に移つた。雑駁な響を立て、機關銃の馬が續いてきた。

疎な家屋は千メートルも續いてゐた。ある駄菓子店の椽先に、數個の小さな柿が穢れた箱の中に轉つてゐた。Fは柿を横に眺めながら走つて行つた。

低い杉の樹の中に、ぞす紅い祠が隠れてゐる前を、通り過ぎると、廣い畑に出た。畑の前面に、先頭中隊が散開しながら前進してゐた。右手の長い松林に、中隊のL故參中尉が將校斥候に成つて、畔を傳つて行つた。
 雲が低く垂れて来た。薄灰いろの空の下に、畑のうへを點綴して行く兵卒の黒い影が玩具のやうに見えてゐた。

F少尉の中隊は大隊の豫備隊に成つて、漸く停止した。

暗いうちから、最う六里ばかり歩き續けて来た。争はれぬ疲勞が皆の肩に感せられた。銃聲が廣く野の面を傳はつて来た。

L中尉が輪廓の大きな顔に、汗を綴らせて歸つて来た。

「中隊長殿、松林の此の方向で、此の方向の林の向側に凹地が有ります。その中に敵の騎兵——旅團位なのでせう。大變な騎兵が停止仕てゐます。驚いちやつた。」

「大隊長に報告して来たかね」

「報告して来ました。大隊長殿も驚いて居られました。此方の騎兵が發見けない筈はな

いのですが、何しろ随分居りました。ねエ P軍曹」

「は、私は那むな澤山な騎兵は始めて見ました。」 P軍曹が息を切つて答へた。

「乗馬してるのかい。L中尉」

「乗馬でした。右翼が危いですね、彼奴に來られては。中隊が攻撃仕て行くと面白いが。」

中隊の誰もが、此の會話に耳を藉してゐた。

然し、大隊長から何の命令も來なかつた。

十分ばかり過ぎた。

松林の方から、L中尉が殘して來た下士斥候の數名が、散らばつて驅けて來た。

「何だ。Y伍長。そこから、其處から言へ。」

「敵の騎兵の徒歩部隊が、松林に侵入して、我に向つて攻撃して來ます。もう直ぐ來ます」

「す」

「どうく、來やがつた」 L中尉が汗を拭きながら、大聲に吐いた。

特務曹長が大隊長に遞傳の報告を送つた。

皆が松林の方を瞞めてゐた。中隊長は中隊を其の方に方向變換させた。そして銃に装填させた。

「最う砲兵が來さうなものだが。」

「眞實ですね。」

中隊長とL中尉と話し終らぬさきを

「や、來た。あれだ！」 特務曹長が叫むだ。

林間を縫ふて、帽子の白帯がチラ／＼と前進して來た。彼方にも此方にも廣い正面を取つて、その將校らしい一人が、林の縁に現はれると、ふと停つて、雙眼鏡を眼に當てた。林の縁から中隊の位置までは六百米位なものであつた。

「中隊長殿 撃ちませう。」

「うむ」

否應なく、中隊は三小隊とも悉く散開した。

「六百米」

ふかし芋

「並に撃カ、レ」

遙か向うに敵の砲兵が砲火を開いた。

火薬の臭が 薄青い煙に傳はつて 各兵の銃口が振動してゐた。

敵は林縁に隠れて、小さな銃聲を林に響かせ始めた。

「大隊命令——」

「をうい」

「第六中隊は、その方面の敵騎を撃攘すべし。終り」特務曹長の高い聲が叫びだ。

「承知。」

「何？ 撃攘ですつて。撃攘は少し難かしい」

實際 敵の線は目に餘る廣さを有つてゐるのだつた。右から、左から浴びせかけるやうに射撃をする。

「活潑に 々々」F少尉は叫びでゐた。

「大隊命令」

「何だ。」

「第六中隊は——」

「うむ」

「情況已むを得ざれば、機關銃を其の指揮に屬す。終り。」

「承知。君、L中尉。機關銃を呼ばうちや無いか。行つて呉れたまへ。」

「は。曹長、小隊を指揮して、やア 中隊長殿 敵の奴も運むで來ましたよ。」

「何を、機關銃をかい 何處にね。」

「黄いろい葉が有りませう」

「詳つた。々々。二挺だね。」

「中隊長殿、第三小隊の前面に敵の機關銃二挺現れました。」F少尉が報告仕した。

L中尉が機關銃の一小隊を指揮して、持つて來た時には、最う敵の方が六挺餘りも

盛に射撃仕てゐた。

「不可ぬねエ、之は」L中尉が大跨にノソノソ歩きながら言つた。

ふかし芋